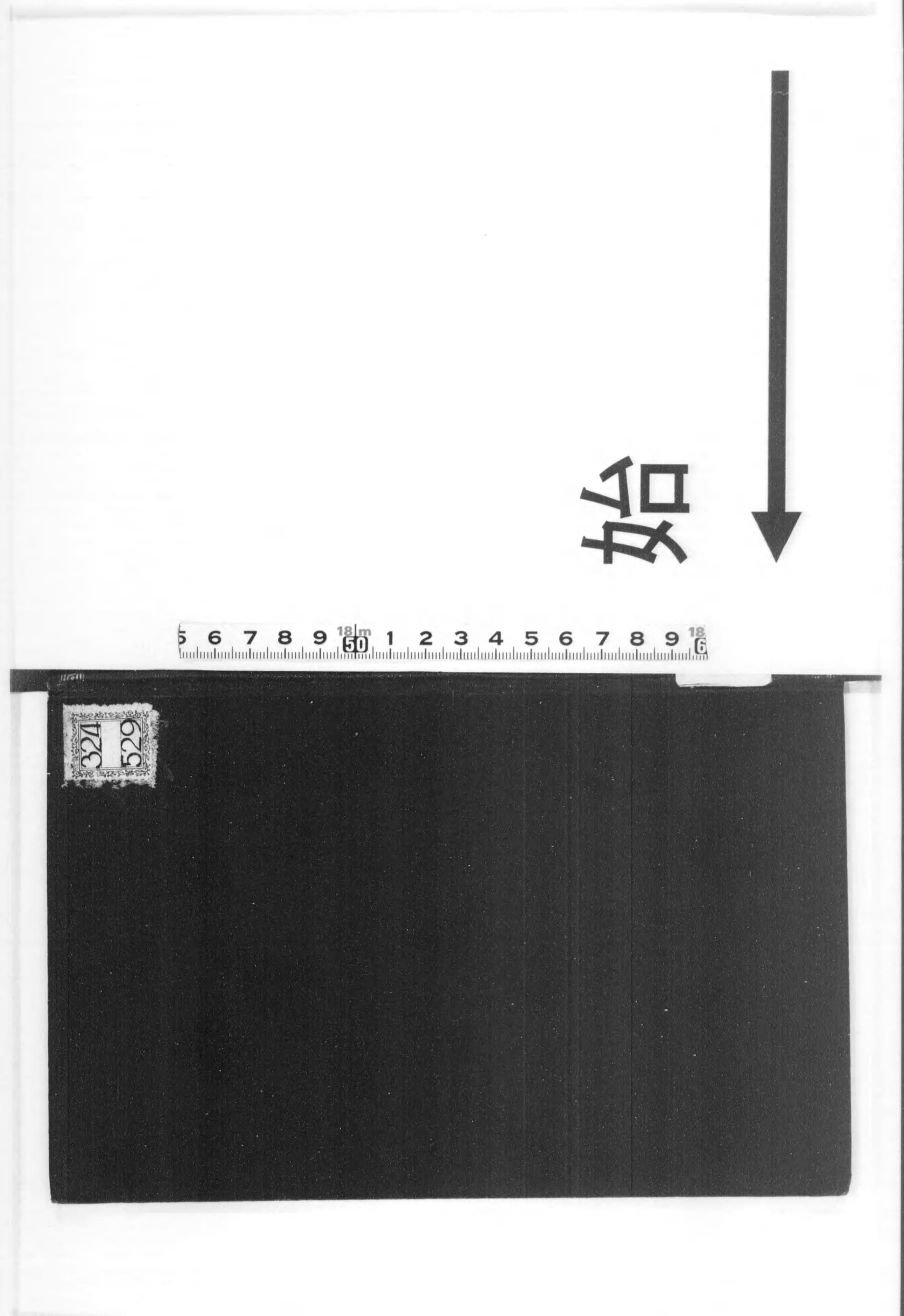

324
529

大典記念

有明山神社誌

324-529

宮內廳書陵部

有明山神社記

大正
6. 5. 30
內交

山家強作

神威恭

民德光厚

大正五年七月

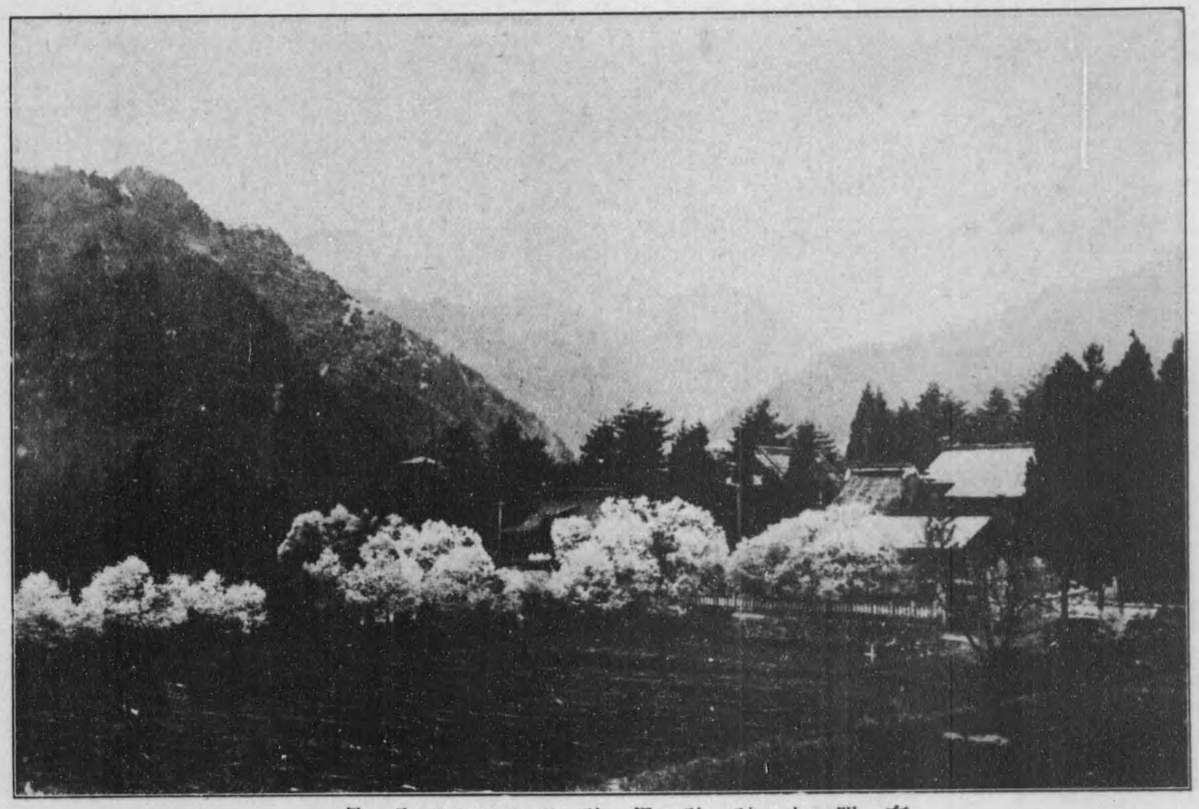
徐人毅

京象子古

天正五年丙辰秋

青蓮題

宮內廳書陵部藏



有明山神社里社（信濃日光）全景

有明山の斬岩

祭神天手力雄命の遺蹟（一名岩戸塚）

縣犬養宿禰の遺蹟

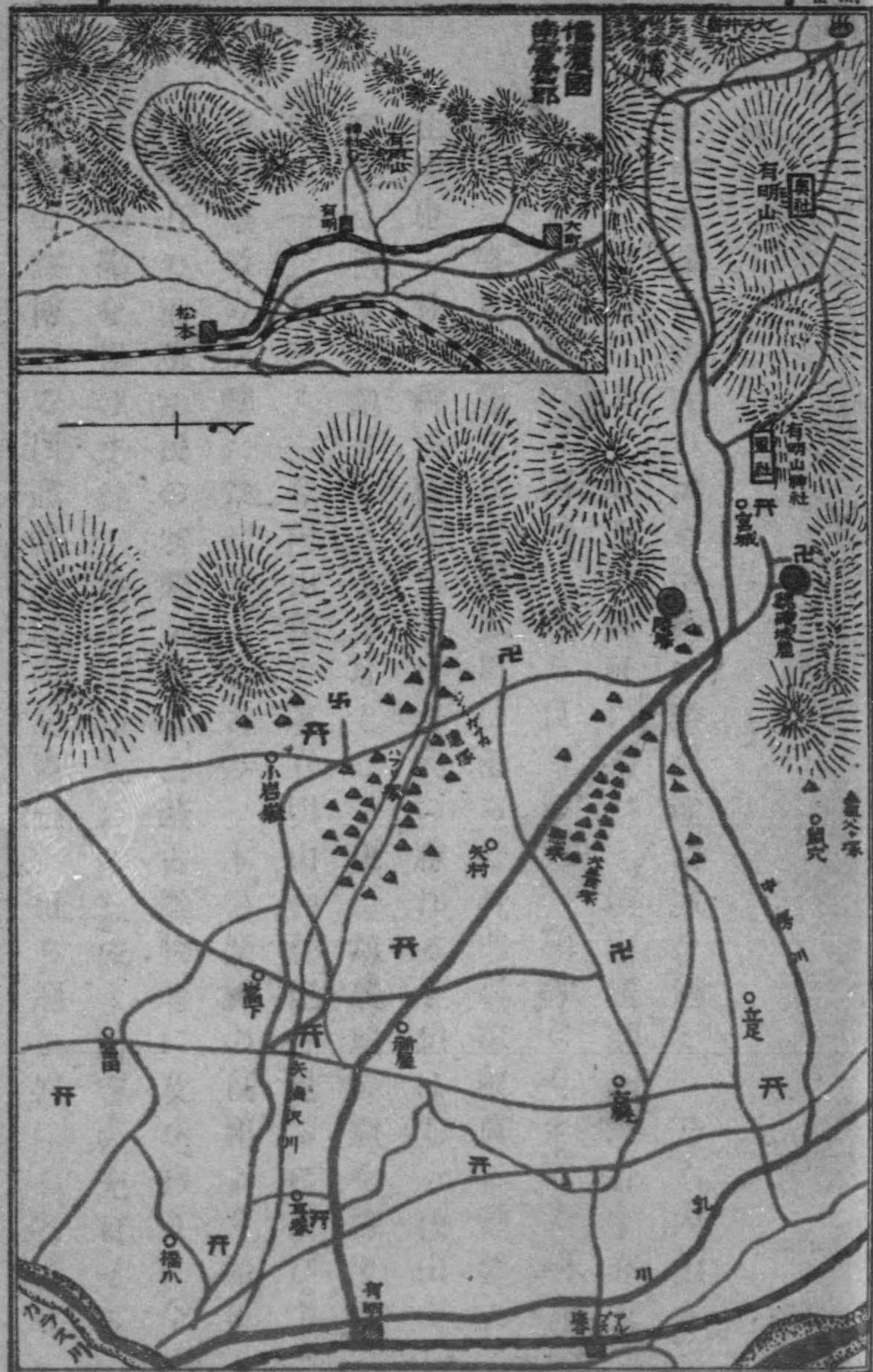
魏磯城の窟（祭神天手力雄命鎭座の遺蹟にして、中世、八面大王、また此處に籠居す）

有明山神社寶物中の古器物

京春の前門明祐（光日濃信）社神山明有

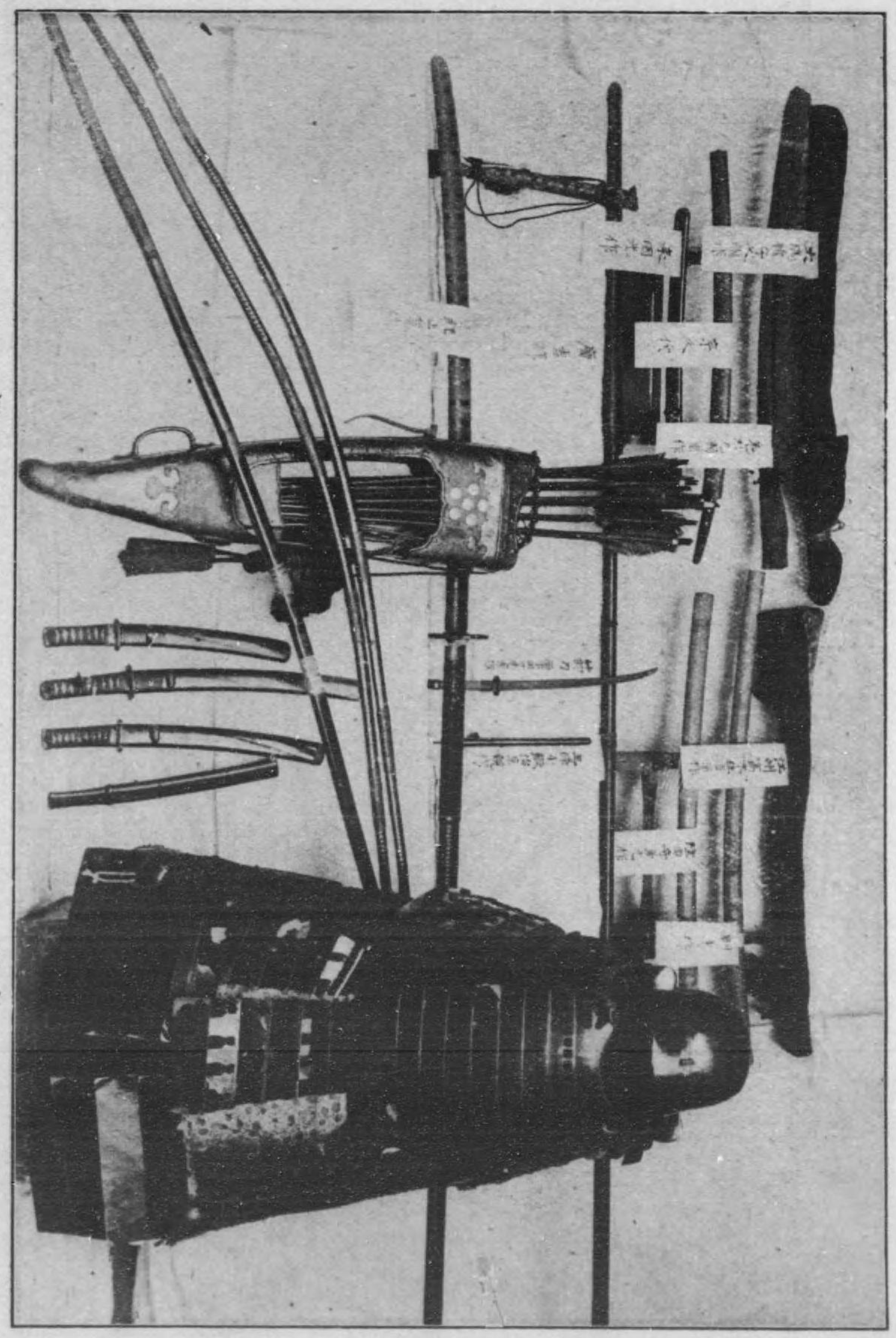
露光量違いの為重複撮影

有明山神社及其の祭神遺蹟之略圖



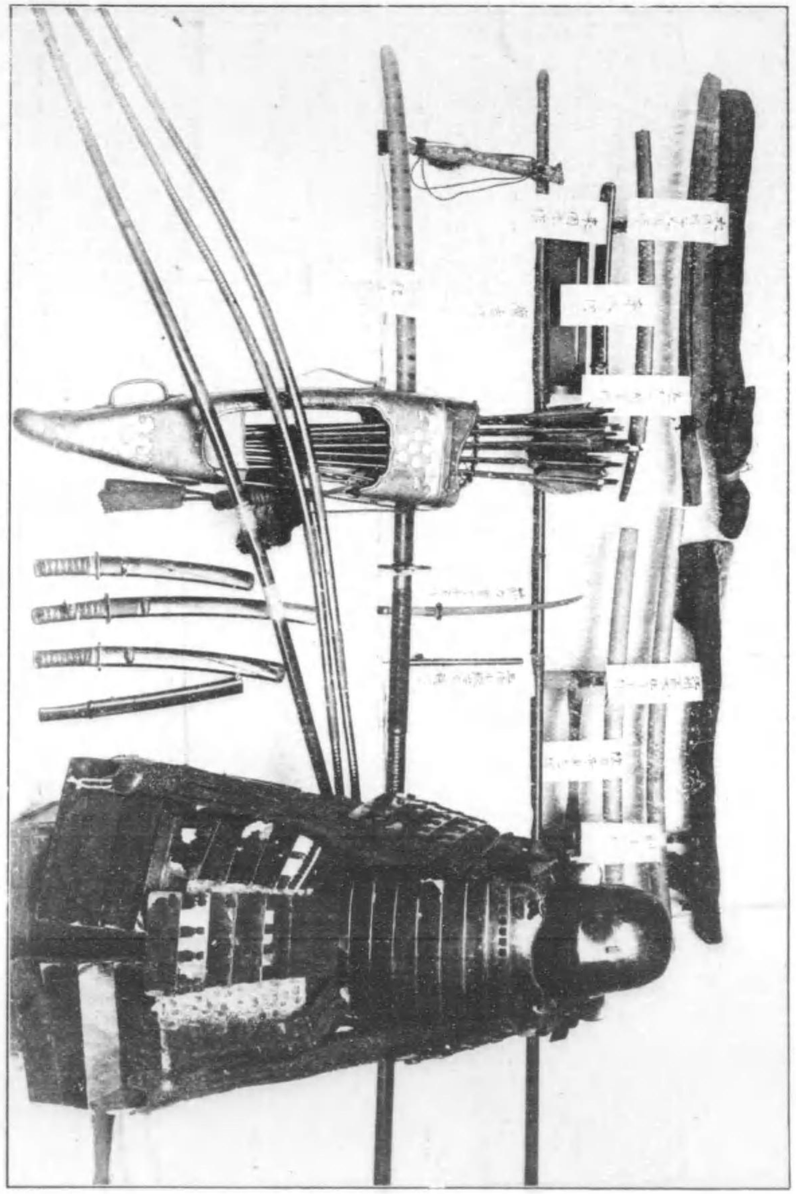
凡例

● 神陵（祭神遺蹟）
鐵道（院線）
鐵道（信濃鉄道）
▲ 古墳（祭神部族遺蹟）
● 神籠石（祭神遺蹟）
中房温泉
开 神社
卍 佛閣
郡界
國境
河川
道路



有明山神社寶物中の武器類の一部

露光量違いの為重複撮影



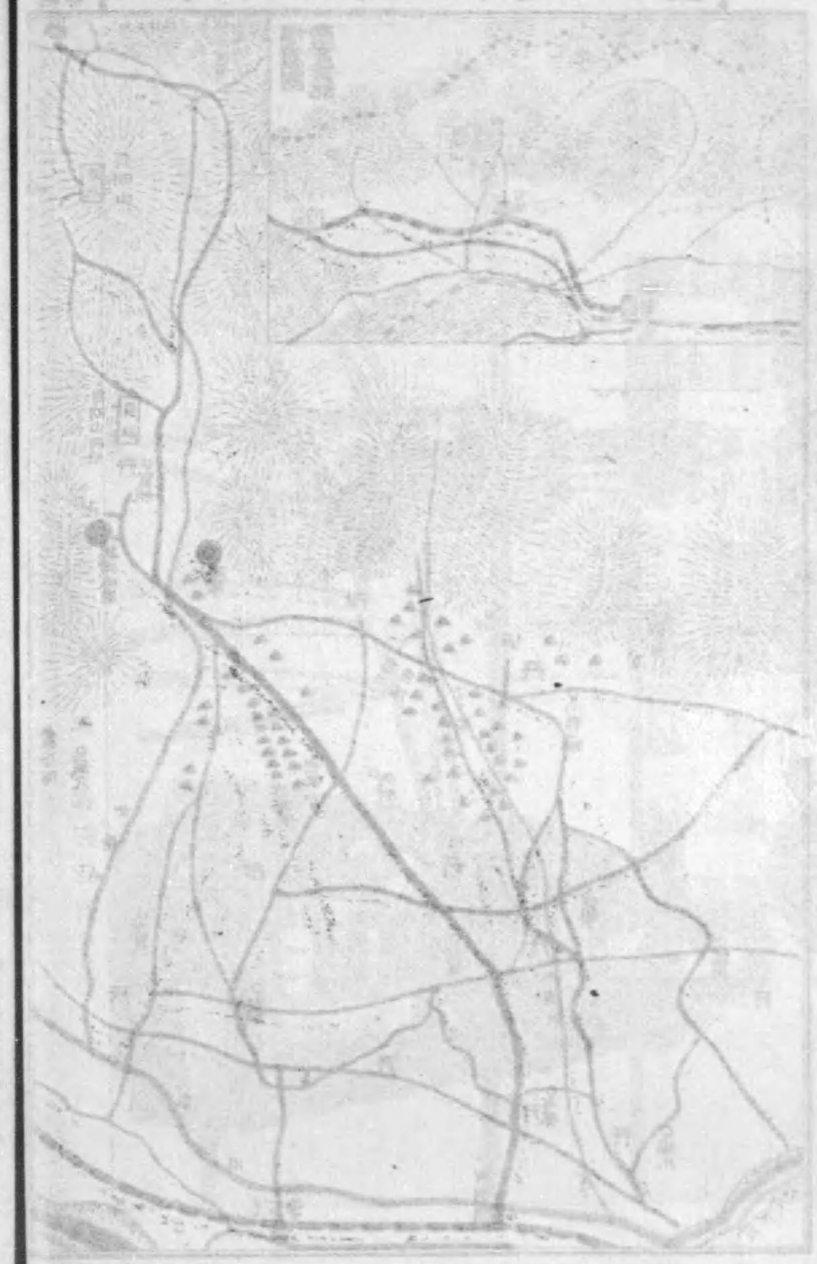
部一の類器武の中物寶社神山明有

有明山神社及其の祭神遺蹟之略圖

凡例

- 神陵（祭神遺蹟）
- 鐵道（陵　線）
- 鐵道（信濃鉄道）
- 古　墳（祭神部族遺蹟）
- 神籠石（祭神遺蹟）
- 中房温泉
- 神社
- 佛閣
- 郡界
- 國境
- 河川
- 道路

信濃國
諏訪郡
有明山
有明
大町
松本
奥社
有明山神社
宮城
鎧塚城趾
陵墓
小岩嶽
大村
中房
富田
福山
有明駅
アルプス



序

予往年植物研究の爲め中房に遊び、途宮城を過ぐ。乃ち内山太一氏の東道により有明山神社に詣づ。境内廣濶幽深社宇亦宏壯にして森嚴の氣四邊に滿ち自ら神威の顯著なるを覺えぬ。時正に盛夏少憩すれば翠嵐眉に落ち心身共に凉爽、眞に神仙の住境也。殊に神域櫻樹多きは春興の勝れるを想はしめ、後山の霜葉は秋望の飽くなきを偲ばしむ。更に魏磯城の窟を探り、山史の一二を聽く。今内山氏の著有明山神社記を見るに及びて懷古崇敬の情轉た禁ぜざるものあり。本書祭神の創祀より始めて地方の沿革治民の狀態を說き、古蹟古器物等に及び、終りに今古の詞藻を揭げて錦上花を添ゆるの觀を成す、内容の充實せる引證の該博なる、所謂緣記案内記の類と自ら選を異にし、名は社

記と曰ふも亦一部の鄕土史と謂ふべし。而も土地稍僻在し從來交通の便を缺きしを以て人の之れを知らざりしも多かりけり。輓近鐵路邇く通じ其地日本アルプスの關口に在るを以て參詣尋訪の客愈多きを加ふるなるべし。是時に當り曠古の盛儀を記念せんが爲めに此著ある誠に時を得たるものか。本書の上梓に方り一言を卷首に加へ著者が曩日東道の恩に酬うと云爾。

大正五年八月南總の客舍に於て記す

正五位子爵　戸田康保

内山太一君大典記念として有明山神社記を修め之を出版せんとして同姓眞楯翁を介して序を徵せらる。予未だ有明山に遊ばず、又神社に賽せず。されど此記を讀んで得る所は身親しく神社に詣して觀る所に勝るあるを覺ゆ。且本記は世に多く見る神社緣起と異り、毫も神怪不思議を語らず、廣く史籍を涉獵して其叙する所正確ならざるはなし。以て大正の新時代に於ける神社緣起の範となすに足らんか。一言すること爾り。

大正五年晩夏北信上林山莊に於て

澤柳政太郎

自序

世に考古の學匠尠からず。然れども其の究むるところは概ね既に世間に流布せられたる學説に就きて是非の批判を試むるに在るか、然らずんば或る特殊の方面に專門的の見解を下すに汲々として廣く一般に渉れる調査と研究の繼續的に行はるるの風を認むるを得ず。是れ固り一二學者の努力に依りて之が實現を期する能はざる難問題なりと雖も、學徒の輩出星辰も啻ならざる聖世に在りて、尙且つ廣くもあらぬ大和島根の鄕土的研究が今日の如く微々たるものに止れるは、餘りに心細き限ならずや。況んや帝國が神の御手に創められ神の裔孫により て營まれつゝありながら、地方に於ける神社の緣起由緒等の調査の極めて粗漏ならずんば、牽强不可思議を説けるもの多きに

於てをや。

豈に之れ聖代の一大恨事ならざらんや。

抑も余の如き寡聞淺識を以てして敢て本著を決行せんと企てたる所以のものは他なし。由緒赫々たる有明神蹟の一隅に生れ、而して其の社記の世に公にせられたるもの未だ之れ有らざるを見て遺憾の念を抱くこと玆に十數年、唯徒らに他人の著の現れんことをのみ期待して鶴首荏苒尙ほ未だ是を得ず、悶々の情は遂に余を驅りて自ら筆を執るの餘儀なきに至らしめき。

時恰も　今上陛下卽位の大典を擧げさせ給ふに當り、密に好箇の記念事業たるを思ひ齋戒以て此の稿を起すに至りぬ。恨むらくは先天の菲才と後天の不文とに妨げられて幾たびか筆を擱いて嘆聲を放ちしことありしも、神の威靈は其の完結を期す

べく常に余に自奮自勵を促し給ひぬ。稿成りて後之を通覽すれば更に何等苦心の跡を存するなきが如しと雖も、素人の操舟は水却て障碍をなすに等しく、識者の以て嗤はんと欲する所は余に於て最も心力を注ぎたる難場なりしなり。

遮莫稿既に成りぬ。幸に江湖の一礫を得て批正の誼を垂れられんか、喜んで之を受くると共に、訂正增補、以て神明の聖鑑を穢さざらんことを期す。

終りに臨みて本書の卷頭に金玉の文字を賜りたる箕浦遞信大臣、戸田子爵、澤柳博士、赤星知事閣下等の芳情を感謝し、此の書を捧げて虔んで梧右に呈すと云爾。

大正五年九月

著者識

有明山神社記目次

第一、總　說……（一）
第二、祭神並創祀……（三）
第三、天手力雄命及其の子孫の遺蹟……（七）
一、祭神の鎭座……（七）
二、祭神鎭座の由來……（九）
三、考　證……（一二）
四、補　遺……（一五）
五、奉祀及遺蹟……（一六）
第四、社號并地名……（一八）
第五、貴族の尊崇……（二一）
第六、社殿の沿革……（二七）

第七、寶　物……（三二）
一、貴族の奉納に係るもの……（三二）
二、古　器　物……（三三）
三、武　器　類……（三四）
四、戰　利　品……（三六）
五、文書及書類……（三七）
六、其の他の貴重品……（三九）
七、寶物の附記……（四二）
第八、建築の異彩……（七五）
第九、詩　歌……（七九）

有明山神社記

内山明文著

第一、總　說

碧巖凝つて山容自ら太古の光を放ち蒼樹結んで幽邃爲に森嚴の趣を添ふるもの是を之れ我が有明山となす。見よ轟轟たる懸瀑は果斷豪邁の意氣を吐き滾々たる溪流は拮据經營の教訓を携へて遠く下界の平野に赴くを。若し夫れ、麓を奔る中房の流れと前に疊める宮城の高臺とは此の靈山をして永へに清淨の神域たらしむるに缺くべからざるものか。

宜なるかな有明山神社の此の地に創始せられてより爾來數千年、尊崇日々に盛ならんとするや。

抑も我が有明山神社祭神は天手力雄命にして大己貴命及び八意思兼命を其の左右に配す。之れ神代の昔、天手力雄命の嚮導として此の土に天降れる天表春命の創祀に係り、社殿は、人皇第八代孝元天皇の五年其の裔神の手に依りて造營せらるるところ。惟ふに、往古の有明山は現今の有明山のみに止ま

らず、其の前に跪まれる二三の丘陵と、前庭の如く開かれたる宮城の高臺とを總稱せるが如く而して其の名の起原は實に遠く神代に在り。卽ち所謂戸放嶽にして、往昔、日神岩戸に籠らせ給ひし時天の下闇黑となりければ、手力雄命、岩戸を取りて投げ玉ひつるに此の處に落ち止りしを以て、斯く名けられたるものなるべく其の有明山と稱へらるるに至りしは手力雄命の天降り給ひし後なるべきは言を俟たず。これ戸隱の名と深き關係を有する所以にして彼の手力雄命の神詔にも明かなるが如く天岩戸の落ち止まれる所は卽ち命の魂の殘れる地にして、命の天降り給はんと欲する動機は、實に此の岩戸の所在に存せしなり。命の降臨久うして四境漸く皇化に沾ひ百千の魔神影を潛めて夜も尙ほ有明の鄕として治平山嶽と共に動かざるに至りて漸く戸隱山に退隱せられたるものと見るを得べく、有明山の名も蓋し此處に於てか、始めてその意義を生ずるものなるを知る。

之れ有明山巓の奥社と宮城なる里社とは共に命の鎭座を齋き祀れる所以なり。況んや宮城の地に命の古居したまへる遺蹟なりと傳ふる魏磯城の窟(口繪參照)の現存せるに於てをや。玆に於てか、此の地一帶を總稱して有明山と呼びたるものなる事も自ら明かなり。

初め天表春命が天手雄命を此の地に齋き祀るに當り大己貴命と八意思兼命とを合祀せられたる所以は前者は多年經營せる此の國土を高天原朝廷に返還し給へる神なるに依り、後者は命の御父神にして手

力雄命の同僚に渡らせられしに依ることならんか。斯くて本社は天表春命の裔、阿智氏に依りて久しく祭祀を掌られしが、後、手力雄命の裔縣犬飼氏穗高見命の裔なる安曇連氏等代々尊崇する所となり、人皇第五十代桓武天皇の御代に至り坂上田村麿東夷征討の際武運長久を祈誓して刀劍其他數種を奉納せしことあり。

降て中世に至り仁科氏亦是を崇敬し中にも承久の初め後鳥羽上皇仁科盛遠に命じて國家の隆昌と皇室の繁榮とを禱らしめ御製及び御刀を獻納せしめ給へり。其の後史籍の徵すべきなしと雖も古老の傳ふる處に依れば松本城主小笠原氏を始め、諏訪、水野、松平等の領主世々之を尊崇し、社殿の造營修築等は專ら仁科氏に依りて行はれたりと云ふ。

明治二十一年故大敎正岡村阜一氏深く本社の衰頽を憂へ、切りに有志の間を遊說して壯麗なる社殿を造營して輪奐の美を凝らすに及び、信徒も亦劇增して遂に今日の隆盛を見るに至れり。

第二、祭神幷創祀

一天手力雄命は、皇祖天照大御神の天岩窟に籠り給ひし時、其の石門を放開し御手を奉引して、新宮に遷し奉れる故に天石門別命とも申し、又其の新宮の御門を守護し開閉を掌り給ふを以て、御門開

閉神とも、櫛石窓豊石窓神とも稱す。卽ち御門神として宮中にても古來重く祭らせ給ふ神なりとす。

古事記曰

天石戸別神亦名謂二櫛石窓神一、亦名謂二豐石窓神一。此神者御門之神也。

太神宮本記曰

御戸開閉神二座天手力男神云々。

古語拾遺曰

櫛磐間戸神豐磐間戸神、今御門巫所レ奉レ齋也。

延喜式曰

神祇官西院坐御門巫祭神八座云々、櫛石窓神四面門各一座豐石窓神四面門各一座

同式祝詞曰

御門能御巫能稱辭竟奉云々、櫛磐間門命豐磐間門命登御名者白氐云々、四方能御門爾湯都磐村能如塞坐氐、朝者御門開奉、夕者御門閉奉氐、疎夫留物能自下往者下乎守、自上往者上乎守、夜能守日能守爾守奉故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣。

一八意思兼命は思慮深く遠く坐々つれば、皇祖天照大御神の天石窟に刺籠り給ひし時、種々に思ひ計

りて手力雄命等と共に、招出し奉りて新宮に仕へ奉らしゝ神なれば、亦名を天兒屋根命とも稱せるなり。

日本紀曰

時有二高皇產靈尊之息思兼神者一。有二思慮之智一云々、遠謀遠慮遂聚二常世之長鳴鳥一亦以二手力雄神一立二盤戸之側一而云々。

古事記曰

高御產巢日神之子思金神令レ思而云々。

日本記一書曰

於レ是天兒屋根命云々、廣厚稱辭祈啓矣。日神聞レ之曰、頃者人雖二多請一未レ有二若レ此言之麗美者一也。乃細開二磐戸一而窺レ之云々。

（註）

○古史傳に、天兒屋根命の名義は、あめのをやねのみこと天招祖主命にて、天照大御神を、天石窟より招出し奉れる主謀者なる故に、御名を斯も稱しにて、八意思兼神の亦名なる由、委しく考證せられたれども、事長れば、玆には大意を抄錄せり。

一大巳貴命は天下を經營し給ひし神なれば一名を大國主神とも申して諏訪大神の御父神に坐すなり。

日本紀曰

大國主神亦名大物主神、亦名國作大己貴命云々、古事記、舊事紀、天書等にも此事項見ゆ。

古事紀曰

須佐能男命云々、遙望呼謂二大穴牟遲神一曰云々、爲二大國主神一云々。

日本紀一書曰

大己貴神與二少彦名命一、戮レ力一レ心經二營天下一云々。

古事記曰

武御雷神云々、問二大國主神一言、天照大御神高木神之命以問使之云々、汝心奈何。爾荅白之、僕者不得白我子八重言代主神云々、亦我子有二建御名方神一云々、白之間其建御名方神、千引石擎二手末一而云々、欲レ爲二力競一云々、爾欲レ取二其建御名方神之手一乞歸而取者、如レ取二若葦一捻批而投離者、卽逃去。故追往而迫二到科野國之洲羽海一、將レ殺時建御名方神曰、恐莫レ殺レ我除二此地一者不レ行二他處一、亦不レ違二我父大國主神之命一云々。

（註）

○諏訪神社緣起に建御名方神は此の時より此の處に鎭座ます。故に諏訪大神とも諏訪明神とも稱し奉る由見ゆ。

此の三柱の神社をば、上古、天表春命創祀し給ふと傳へたれば、卽ち當社は、神武天皇以前の神跡にして、社殿の經營は、蓋し孝元天皇の五年や其の始なるべき。

舊事紀天神本紀曰

天ノ表春命ハ八意思兼神ノ兒信乃阿智ノ祝等ガ祖。天ノ下春命ハ八意思兼神ノ兒武藏國秩父國ノ造等ガ祖。

同紀國造本紀曰

瑞籬ノ朝八意思兼神十世ノ孫、知々夫彦命ヲ定二賜秩父國ノ造一。

（註）

○瑞籬の朝は崇神天皇の御宇にして天下春命の子孫は此の朝に於て十一世なるに比すれば天上春命の子孫も尙また十一二世たるべきや疑無からん。

信濃舊事記、戸隱緣記、阿智舊記、御陵緣起等に天表春命の當國各地を巡視し給ひ、且阿智川邊に駐在給ふ事など見えて前載の舊事紀及び當社舊紀等相互に符合する所甚多し。

第三、天手力雄命及其子孫の遺跡

一、祭神の鎭座

當社祭神中、天手力雄命は神代の昔、天表春命の嚮導に依りて有明山に天降り其の山麓、宮城の地に鎭座し久しく此處に留り給ひしが後遂に戸隱山に遷座し給へり。而して祭神鎭座の場所を宮城（宮代とも云ふ）

と稱す。

抑此地は西北東の三面山を繞らし、南方中房川を隔てゝ遠く安筑の平野に向ひ、天然に城廓の形をなす。而して西より北にかけて四つの溪越あり（中房入、榛木澤、神明澤、魏磯城入）此溪越に對して蜿蜒十數町の長堤を築き、延いて中房川の左岸に及び凡そ十數間の距離を保ちて天然の高堤の上に更に土を盛りて前後の境域を劃し以て外敵の侵入に備へたるの形跡あり。是卽ち神奈備（かむなび）、一名磯城（しき）にして太古の遺蹟也。又此中に祭神手力雄命の籠り給へりと傳ふる窟も存在し（此窟を現代の學者は神籠石なりと云ふ。此神籠石なるものは建國時代に天つ神の一部が一時代に鎭座したる所なり。）此所を稱して魏磯城（ぎしき）の窟と云ふ。中世に至り八面大王と稱ふる蠻族の巨魁來つて此所に居を占せり。（八面大王に關する記事は貴族の祭祟の條及び社殿の沿革の條に記載すべきにつき玆には省く事とす。）（日繪も參照）

（註）

○宮城はミヤキに通じ所謂磯城卽ち神奈備なりしなり。磯城はキにて葛城、高城、稻城、茨城、石城、水城、など何れもキなり垣又は墻と書きてカキと讀む。其のキも元より同一の義にして、古くは柵をかきとも訓めり。牧も語源は馬城（むまき）にして馬を飼ふ場所の垣の義なり。籬をマカキ神籬をヒモロギといひしも同じく一種のキなればなり。

神奈備は磯城と云ひて神靈鎭座の場所なり。延喜式內の祝詞の中の出雲國造神賀詞に曰

大穴持命の申し給はく、皇孫命の靜まりまさん大倭の國と申して、己が命の和魂を八咫鏡に取りつけて倭大物主櫛甕玉命と名を稱へて、大御和の神奈備に座させ、己が命の御子阿遲須伎高孫根の命の御魂を、葛木の鴨の神奈備に座させ、賀夜奈流美命の御魂を飛鳥の神奈備に座させて、皇孫命の近き守神と貢り置き云々。

日本紀雄略天皇の赤猪子の歌に

三諸に築くや玉墻つきあまり誰にかも依らん神の宮人。

萬葉集十一に

神奈備に神籬立てゝ祈れとも人の心は守りあへぬかも。

同じく

神奈備の打廻（うちは）の崎の岩淵に隱れてのみや我が戀ひ居らん。

夫木集に

神籬は神の心に受けてけむ比良の高根も木綿蔓（ゆふかづら）せり。

神奈備は卽ち瑞籬なるものにして、古代は土又は石を以て築かれたるものなること、前載の古歌に依て見るも明かなり。古代、神の鎭座したる所には多く周圍に土堤の如きものを築き、又は石を並べて城廓の如くなしたる遺蹟は大和及び九洲地方等にも各所に存在す。

二、祭神鎭座の由來

天手力雄命天の岩戸を取り投げ玉ひしに、有明山に落ち來れり。夫より此の山を戸放嶽と云ひしが後

漸く天の下明かになりける故に、又有明山とも呼べり。之れ卽ち手力雄命は彼の岩戸開の後、天表春命と共に此の所に天降り鎭座したまひしが、後漸く此の地、王化に沾ふに至り、更に北方陰闇の地なる戸隱山に隱棲し給ひしこと戸隱山昔事緣起及び當社舊紀、信府統記等に徵して明かなり。何となれば彼の岩戸は命の御魂の籠れるものにして、戸放嶽とは卽ち命の天降りたまへる山なるがゆゑに、又、戸隱山とは卽ち命の隱棲せられたる地なればなりと解し得べければなり。

有明山三社大權現舊紀に曰

有明山三社大權現者奉レ齋ニ天手力雄命一者也太古神代之世放ニ天岩戸一投レ之其岩落止ニ此所一故名ニ此山一曰ニ戸放嶽一又曰ニ有明山一也後天手力雄命與ニ天表春命一相共天降于ニ此山頂一鎭座矣也時六合清明而殆如ニ有明一於レ是二神相議更欲ニ岩戸隱レ于ニ陰闇地一會北方雲表際認ニ峯巒一移以隱レ之二神亦遷ニ座此一是卽戸隱山也云々。

戸隱山昔事緣紀曰

手力男神詔曰、吾在レ天時石戸拋落、今科野國止在而成レ山矣、彼山者吾魂之殘地、則彼所行而住事可ニ信然一云々。

信府統記曰

有明ノ里ト云フハ有明山ト云ヘル大山ノ麓ナルガ故ナリ。山ノ名ヲ戸放ガ嶽トモ云フ。其子細ハ往昔日神岩戸ニ籠ラセ給ヒシ時、天ノ下闇黑トナリタルユヱ、手力雄命、岩戸ヲ取テ投ケ玉ヒシカバ此所ニ落止レリ。夫ヨリ天ノ下又明カニ成ケル故ニ此山ヲ有明山トモ戸放ガ嶽トモ云フトナリ。云々

（註）

○時に六合清明而殆如ニ有明一とあるは前に述べたるが如く、全土王化に沾へるの形容と見るを至當とす。

尙又手力雄命が取て投げ玉へる天の岩戸が、科野國有明山に落ち來れりと云へるは、天の岩戸を投げ玉ひし手力雄命が有明山に天降り給ひしと云へる意義なり。

信濃地名考曰

舊事紀云、八意思兼命神兒(ミコ)表春命信乃阿智祝部等祖、一云孝元天皇五年、天八意命神兒將ニ手力雄命一天降信濃國一吾道宮鎭座手力雄命戸隱山遷座云々。

信陽雜志曰

孝元天皇　五年春正月、天八意命神兒大神將ニ手力雄命一、天降科野國一親立ニ吾道宮一入レ宮鎭座、手力雄命遷ニ戸隱山一。

千曲眞砂曰

信濃國史曰、人皇八代孝元天皇五年辛卯兒大神天ニ降科野國ニ建ニ吾道宮ニ鎮座手力雄命、遷ニ戸隱山ニ親營ニ巖崛ニ鎮座云々。

（註）

○以上の書には有明山云々の文字なけれども、敎れも手力雄命が戸隱山に遷座せるゝことは明かに載せられあるを以て見ても、前文を照應して、一旦有明山に留りたまひし事自ら納得せらるべし。

三、考證

高天原朝廷の大英雄にまします天手力雄命が、一路科野國に天降り給ひけるは、表面の、「吾御魂之殘地、則彼所行而住事可ニ信然ニ」と云ふが如き、極めて單純なる意味に依れるものにあらずして、其の裏面には、實に重大なる任務を帶ばせたまひしものなる事、蓋し察するに難からざるなり。

古傳說曰

大己貴命の經營既に成るの時、高天原に在りては、天照大神萬機を親裁し給ひ、高皇產靈神之れが輔翼贊襄の任に當らせ給ひて、德風遐邇に及び、皇化四方に布き、肇國の天業漸く將に完から

んとす。是に於て、天忍穗耳尊を以て、天日嗣の高御座に卽かしめ給ひたるに、草木も亦た皆喧々囂々天下の物情頗る騷然たるものあり き。

是に於て天照大神は、高皇產靈神と議り給ひ、八百萬の神達を天安河原に召集して諸問審議す。先づ八意思兼神をして深く思をめぐらしめ、天穗日命を始めとし其他の諸神を選びて、出雲に遣はし、領土奉還の大命を大己貴命に傳へしめ給ふこと數回、而も未だ其の効を奏せず。玆に於てか更に勇將を選任し、卽ち經津主と武甕槌の二神に兵を與へ往て皇命を大己貴命に傳へしむるに、奉還條件八事を以てす。是に於て大己貴命謹みて大命を拜謝して曰く、「天つ神の勅諭の慇懃優握なること斯の如し。敢て大命に順はざらんや。卽ち吾の領する國土は、天つ神の御子當さに之を治らすべし。然れども我子事代主命あり。願くは更に彼に就きて其の意を糺し給へ」。と二神乃ち事代主命に傳ふるに勅命を以てし、且つ告ぐるに父の命の恭順を以てす。事代主命、答へて曰く、「我父既に領土を奉還せり。我も亦何ぞ違ふべけんや」、と、乃ち船に乘りて海を航し、遂に其の往く所を知らず。

此の時に當り、事代主命の弟、建御名方命は獨り皇命に遵はず、其の勇を恃みて兵を構へ、以て二神に抗す。二神乃ち一擧にして之を破り、逃ぐるを追ひて科野州羽海に到る。建御名方命進退

茲に谷まり、遂に降を乞うて曰く「幸に一命を助けられよ。爾後恭順の意を表し、又決して諏訪郡外に出づることなかるべし。仍て諏訪一郡を父大己貴命の讓土として我が爲に之を天つ神に請はれよ」、と。神等乃ち由を高天原に奏請して勅許を受け、仍て其の降を容るす。

想ふに大己貴命の旗下卽ち出雲政府に仕ふる國つ神の中に於て、此の領土奉還の大問題に異議を稱へ、且つ皇命に抗するの勇者は獨り建御名方命を除いて他にあらざるなりき。然らば建御名方命は出雲政府卽ち國つ神の中實に英邁剛勇の士と言はざるべからず。

茲に於てか高天原朝廷が此の一大英雄なる建御名方命の一命を助けて以て州羽郡を分ち與ふる所以のものは偏へに大己貴命の功勞によりてならんか。遮莫、是の大英雄なる建御名方命を諏訪郡に封ずるに當り、之と拮抗し、能く其の守備と監視の任とを完うし得べきものは實に天手力雄命を措きて他に多く求むべからず。大命卽ち命に下るに及んで、名を御魂の殘地に住はんとの口實に籍り、天表春命外三十一神を隨へ、安曇の海の沿岸なる有明の山に天降り給ひて久しく此の所に鎭座し、近く隣れる諏訪の海邊の兇雄を監視し、彼が完く恭順の實を示すに至れるを見屆けたる頃は命も既に年老いたまひしを以て、斷然引退して戸隱山に遷座し、遂に此の所に卒し給ひしならむ。

抑も此の大英雄、建御名方命を科野に封ずるに當り、高天原朝廷が其の防備と監視とを嚴にせんことは、誠に故ある事ども なり。

若し夫れ一朝建御名方命の野心勃々として起らんか、窃に東國の兵を喚んで一擧高天原に反旗を飜へすの時、其の勢や實に侮るべからざるものあらん。是れ手力雄命の降下を見たる必要條件たらずんばあるべからず。

四、補　遺

同古傳說曰

手力雄命の後を享けて第二次に諏訪方に對する守備監視の命を奉じて科野國に天降り給ひたるは宇津志日金折命なりしなり。命の此の地に降り其の任に當るや、穗高見命と改稱し終身其の任務を盡されたりと云ふ。

（註）

○穗高見命と稱へしめ給へるは其の任務の意味を顯はしたるものにして、穗高見の穗は穗先、卽ち尖なり。鉾、劒の先を穗先と云ふは此の義なり。後に至りて穗なる語は鉾、劒等の武器を總稱せり。高見は高く見張すと云ふ義にして、穗高見は卽ち鋭利

なる武器を持ちて高く見張りするなり。之れ卽ち所謂建御名方命を監視するの任務を直ちに御名に寄せられたるものといはむ。

五、奉祀及遺蹟

天表春命は天手力雄命其の他二神を有明山巓に創祀し犬養宿禰及び阿智祝部等をして祭祀を司らしめ給ひたる遺蹟として山麓なる宇宮城及び其の附近の地に六十餘の古墳あり。此の中一を陵塚と云ひ亦岩戸塚とも稱す。其の附近に犬養塚あり。(イヌケエ塚と云ひ犬養氏等の塚)、又別にはふり塚(阿智祝部氏の塚)縣塚(アナタ塚と云ひ縣犬養宿禰氏等の塚)、連塚(モラジ塚と云ひ安曇連氏等の塚)、祖父が塚(眞の祖父氏の塚)、などあり。先年里人等樹木植栽又は開墾、石材採取等の爲め是等古墳中二十有餘を開堀したるに偶各種の古器物を發見せり。何れも上古の器物にして貴重のもの少からざる趣を以て宮內省の御買上品となり或は發見者の所有に歸したるもありき。

(參考)

發堀古器物

曲玉、青色、瑠璃色、赤色、管玉、紫玉、白玉、金環、銀環、金掛の裝束品、刀劒、石笛、雷斧、凹石、齋甕、忌瓮、高杯、缶、米杯、平杯、片缶、曲玉壺、高坩、坩、瓮、平瓮、手抉、半挿、

(註)

○明治三十三年六月理學博士坪井正五郎氏來城し宮城及び其の附近の古墳、岩窟等を親しく調査したるに巖窟は神代に於ける天つ神鎭座の遺跡(之を稱して神籠石と云ふ)又古墳は何れも其の年代を異にし、其の最新しきものと最古きものとは凡そ千年の相違あり又發掘したる古器物も最古きは神代より、新しきは千年以後のものもありて何れも貴族の所持品に屬すと云へり。

信濃地名考曰

古事記曰、綿津見神者阿曇連等之祖神云云、姓氏錄曰、安曇宿禰は海神綿績豐玉彥神子穗高見命後云云又海神後海犬養の姓も見えたり云々。

同上曰

舊事紀云八意思兼命神兒(ミコ)表春命信乃阿智祝部等祖云々。

姓氏錄曰

多米連、神魂命五世孫、天比和志命之後なりとある次に犬養、同神十九世孫田根連後云々。

左京神別曰

犬養宿禰、神魂命八世孫、阿居太都命之後也云々。

(註)

○天比和志命は手力雄命の御子、又阿居太都命とは手力雄命の亦の名にして犬養氏は手力雄命の子孫なり。

信濃地名考曰

辛犬（加良以奴卽、犬養也八村あり、犬養新田の名あり今屬二安曇郡一）云云。辛犬は辛犬飼の一字を省きたるなり按に安閑記に曰二年國國置二犬養部一云々。

（註）

○犬養氏の後裔は現在東筑摩郡烏内村（元安曇郡成相組に屬す）、犬飼、犬飼南中、犬飼北中、犬飼新田、其の他の四部落に渉りて姓を犬飼と稱し勢力を極む。

然るに當社及び戸隱神社等は中臣の專横によりて、共に式内の神明帳に洩るゝの餘儀なきに至りたること、返す返すも遺憾とする所なり。

信濃地名考曰

筑摩郡の大郡に式内ノ神三座あり更級郡の小郡に式内ノ神十一座見ゆ過不及あらずや古語拾遺曰至二天平年中一勘（ヘ）造ル神ノ帳（フンダヲ）一中臣專レ權任意取捨有レ由者ハ小祀モ皆列シ无レ緣者ハ猶廢數奏（シバ〳〵）ノ施シ行フ當時獨歩ナリト云云。

按に中臣の權によりて神も幸不幸ありしなるべし。

第四、社號幷地名

さて當神社を有明山神社と稱したるは、山名に因れるものなる事は明なれども、山名の本據とする所は、卽ち祭神の功德に淵源せしなり。初め祭神手力雄神、彼天之石戸を引放ち開明け給ふ時に際し、八意思兼命の深遠なる智謀を以て、常夜の長鳴鳥を集へて鳴か令め給ひ、東天漸く明けんとする曉方を現し日神中より戸を細目に開けて徐ろに外面を窺ひ給ふを、手力雄命逸早く其の戸を取つて抛げ給へば、乃ち落ち來りて此の處に止り凝つて山を成す。之れ卽ち戸放嶽にして此の山、命の神靈の殘地たるの故を以て、遂に命の降下となるに至りしが、此の地の鎭座久うして戸放嶽一帶の地方文化洽く夷狄魔神の跡を絶ち夜も尙ほ有明の鄕の如くなりしかば戸放嶽は有明山に、從て最初の號なる戸放權現は後に、有明權現といひ、更に有明山神社を號するに至れり。

日本紀曰

是後素戔嗚尊之爲行也甚無レ狀。何則天照大神以二天狹田長田一爲二御田一時、素戔嗚尊春則重二播種子一、且毀二其畔一、秋則放二天班馬一使レ伏二田中一、復見下天照大神當二新嘗一時上、則陰放二屎於二新宮一。又見下天照大神、方織二神衣一居中齋服殿上、則剝天二斑駒一穿二殿甍一而投納。是時天照大神驚動以レ梭傷レ身。由レ此發慍乃入レ于二天石窟一、閉二磐戸一而幽居焉。故六合之內常闇而、不レ知二晝夜之相代一云々。

故思兼神深謀遠慮、遂聚二常世之長鳴鳥一、使二互長鳴一、亦以二天手力雄神一立二磐戸之側一云々。是時天

照大神云々、細ニ開磐戸ニ窺レ之時、手力雄神則奉ニ承天照大神之手ニ、引而奉レ出云々。

古事記曰

故天照大御神出坐之時、高天原及葦原中國自得ニ照明ニ云々。

（註）

○尙古語拾遺を按するに、衆俱相見面皆明白矣云々などありて、總べて鷄鳴きて東天明くと云ふ狀なり。杜鍬の謂、地名の因、以て往古にある事推知せらる。

戸隱本院昔事緣紀曰

天手力雄大神靈異勇武御魂、以ニ其石屋戸ニ引開而投給云々。今科野國止在而成レ山矣云々。阿智社之祝登山而、天手力雄神之本殿、表春命思兼命之二柱、爲ニ相殿ニ而令レ祭給云々。

（註）

○何れも亦以て參資に供すべきなり。後世左の說あるも、此の神代の事實を承傳せしものなるべし。

信府統記曰

有明ノ里ト云フハ、有明山ト云ヘル大山ノ麓ナルガ故ナリ。今ノ松川組ナリ山ノ名ヲ戸放ガ嶽トモ云フ。其子細ハ往昔日神岩戸ニ籠ラセ給ヒシ時、天ノ下闇黑トナリタルユエ、手力雄命岩戸ヲ取テ投ゲ玉ヒシカバ、此處ニ落止レリ。夫レヨリ天ノ下又明カニ成ケル故ニ、此山ヲ有明山トモ戸放ガ嶽トモ云フトナリ云々。

勢陽五鈴遺響を按するに

伊勢の齋宮村に、齋宮森、御河ノ池、御門畑、有明ノ池などの地ある所に、艮（うしとら）神社と云ふ社ありて、此の社は其の開闢を守護せらるゝ神、卽ち手力雄命を祭れるなり。祭神と云ひ、有明ノ池と云ひ、當社號及び地名等の適例とも云ふべきを以て、玆に引證せしなり。

信濃地名考曰

有明山安曇郡松川の西にあり。又姥捨山の東南の山を有明など云ふ。有明の東にあるべうもあらずと他（ひと）もいへり。素よりかつら尾の山といへば違ひぬべし。宗祇方角抄に、更級と有明山の歌をならべ入れられたるになづみたるにや。

第五、貴族の尊崇

當神社に對する皇室、並に武將等の尊崇は、舊記缺漏して往古の事情詳かならず。犬養氏、阿智氏、安曇氏等の名族、尊崇奉祀せし實蹟のみ僅に存せり。桓武天皇の朝、將軍坂上田村麿、當國ノ下向の

時、奉齋して武運を祈誓し、刀劍其の他數種を奉納せられき。

信府統記曰

延暦二十四年、田村將軍當國に發向、矢原ノ庄ニ下着、中界ト云フ所ニ入ル今ノ長尾與中萱ノ事ニヤ。穩高神社ノ緣起ニ曰ク、人皇四十九代光仁天皇ノ御字、義死鬼ト云フ東夷、神領ヲ掠メ、宮社ヲ燒亡シ、萬民ヲ惱亂セシメシニ依テ、桓武天皇ノ勅命ニテ、延暦年中田村利仁、東夷ヲ追討スト云々、吉祥ノ地ナレバトテ、川會ニテ軍兵ヲ揃へ、翌大同元年鬼賊退治此時鹿島明神ニモ祈誓アリ云々アリテ矢澤ト云フ山ノ奥マデ攻登ラル。鬼賊所々ニ防ギ戰フト雖終ニ叶ハズ、散々逃落テ爰彼所ニテ皆討捕ラレケルトナリ。今ノ松川與耳塚ト云フ所ハ、彼夷賊等ノ耳ヲ埋タル塚アル故ニ號ニ唱ヘ來レリ云々。鬼賊ノ劍ハ戸放權現ニ納メヲル云々、有明ノ里ヲ仁科ト號セシモ、此時ヨリノ名ナリ。鬼賊仁ノ科トナリタル義ヲ以テ、田村麿ノ名付ラレシトカヤ云々、將軍逗留ノ間ニ、當郡三年ノ貢ヲ赦サル。是人民、彼賊ノ爲ニ惱サレテ困窮セシガ故ナリ。此厚恩ニ、國人等將軍ノ武運長久ノ祈禱トシテ、神社佛閣ヲ所々ニ建立シテ、田村將軍ノ建立ト札ヲ書キ納メケルトナリ云々。

科野風土記抄曰

延暦二十四年頃中房山に鬼人住て人科と成魏石鬼八面大王というもの有り故に坂上田村將軍利仁公退治に御出張本陣は矢原庄に御着是より中界の城に御移り往古目出度き御城とて川會にて軍兵を揃翌大同元年八面大王御退治有て則鬼人の劍を戸放權現に納めて鬼神科となる故是よりして仁科と書きて仁科と號す云々當國三年の間年貢不納になし下され此厚恩に百姓田村將軍御繁昌御祈禱として神社佛閣建立し田村將軍御建立と札を書納たまう其時等々力玄蕃成時と云ふ者當所に殘し置都へ御歸りとなり

註

○坂上田村麿は坂上苅田麿の子なり、苅田麿は甲斐の國司となられしことあり其の赴任の途次信濃を通行す。苅田麿の父は犬養と云ひて歸化人の後なり。

延暦五年より九年迄懸犬養宿禰堅魚麿と云へる信濃國司あり續日本紀等しく歸化人の後なり。

苅田麿は延暦四年に姓宿禰を請ひ一族皆宿禰の姓を賜はる、又縣犬養宿禰とは親族の關係を有す、故に延暦十四年及二十年の兩度の東國征討の時信濃を通過せる田村麿の事蹟もありければ親族關係上又は信濃國司の爲めに地方の亂賊を征伐したるものならん。

當時々勢の然らしむる所として爭亂大に諸國に起りたりけり、朝廷は徴兵を擬せられて僅少なる近衛あるのみ、地方に爭亂起りし時には唯豪族に依頼せしのみの時代なれば有明地方の反亂も亦是等の時に起りしものか、蓋し反者は當時地方の豪族たること勿論なり、何となれば國司廳松本地方に近き所にして此の反あるは豪族にあらざれば能はざればなり。

延喜の制によれば當時信濃國司廳の兵は百人内外なりしと。

中世に至り仁科氏當地方を領せし以來、累世當社を崇敬せらる。當時仁科領は今の南北安曇郡に亘り

て、甚廣かりし故に、此の南北安曇郡を總稱して、仁科とも呼べりと云ふ。

承久の初め仁科城主仁科盛遠、北條義時の專横を極め、屢々朝廷の命を矯むるを憤り、父子相携て京師に上り、以て爲す所あらんとし、密に時宜を窺ひたりしに、適々後鳥羽上皇の熊野參行ありと聞き、往て路傍に跼き居て其の所存を伏奏するを得たり。上皇大に之を悅び給ひ、其の子を擢て西面とし給ふ。上皇曾て鎌倉を亡して皇室を興隆し、國政を改進せしめんの慮あり。盛遠の關東事儀に委しきを以て、時々召されて近侍內議す。或日領中なる有明山明神の武德ありて、靈驗炳然たる事を讃す。上皇國家の隆昌を神社佛閣に祈り給ふに當り、盛遠をして之を明神にも誓はしむ。北條義時之を聞て怒て云はく、彼既に鎌倉の恩を承くること久し。今何ぞ恣に仙洞に侍衞すると。乃ち命じて其領邑を沒せしかば、上皇之を聞きて大に憂ひ給ひ、爲に左の御製及び御刀を賜ひて、開運を明神に祈らしめ給ふ。

「片敷きの衣手寒く時雨れつゝ有明山にかゝるしら雲」、と是皇室の衰替を歎き其の興復を有明山の神に祈るの御意に出でし也。又更に義時に勅して、其の領邑を還さしめ給ふ。盛遠則ち我所領の內住吉莊（今の南安曇郡溫村の內楡村附近を云ふ）を奉つて院の御料となす東鑑に見ゆ

承久記曰

こゝに信濃國の住人に、仁科の次郎盛遠と云ふ者あり。十四五になる子二人もちたり。ぞんちあるによつて、元服もさせず。をりふし院熊野參詣のみちにて參り會ひ、やがてげんざんに入り奉り、しか〳〵と申しければ、すなはち、西面に參るべき由仰せ下されけり。悅びをなし云々共に參る。義時傳へ聞て、關東の御恩の者が、義時に案內をも經ずして、さうなく、京家奉公のでう、甚以て奇怪なりとて、盛遠が所領、五百よちやう沒取し畢んぬ。盛遠其由を院に申しければ、かへしつくべき由、義時に院宣を下さる。御うけぶみには返すべき由申ながら、すなはち地頭をすゑられけり。院奇怪なりと御氣色なゝめならず云々、東鑑も本文と大同小異なれば省略す

大日本史列傳曰

仁科盛遠承久記、仁科系圖、鎭守府將軍平貞盛之裔、世居二信濃一仁科系圖嘗以二宿禱一契レ兒詣二熊野一。適上皇幸二熊野一、路見二兒淸婉一愛レ之、命爲二西面一。盛遠大悅、從至二京師一侍衞。北條義時怒曰、彼既承二關東之恩一、何得二恣咫二尺仙洞一乎。乃沒二其邑一、上皇勅令レ還レ之云々、上皇久蓄二憤關東一、至レ是討伐之議遂決。承久記盛遠與二宮崎定範糟谷有久一守二北陸道一東鑑、久記、承盛遠軍二磯波山一、有久軍二志雄一、率二加賀越中豪族林富樫野尻等一、與二北條朝時一戰兵敗承久記盛遠戰死仁科系圖。

（註）

○承久記、東鑑等には、此の御製の事見えず。素より秘密の儀なればなるべし。龜山天皇文永の頃、院宣によりて、續古今和歌集を撰ばれし時、後鳥羽院御製の中に和歌所歌合に聴時雨と題し出だされてあり。

有明山三社大權現舊紀曰

承元二年仁科城主仁科盛遠有二負請下知狀者一。

有明山大權現久敷退轉之處可レ有二再興一之旨最感慎之至寒天之時分候へ共旦速復二古舊一相續可レ爲二肝要一者也依如レ件。

十月三日　　盛遠　花押

後鳥羽院詔二仁科盛遠一令三國家安全願レ干二權現一令レ奉二納大隅權守久國之御太刀及御製一

片敷の衣手寒時雨都々有明山仁掛類白雲。

弘安九年十月仁科城主織部正義元行二權現之修營一。

（註）

○其の上棟式に使用したりし木製の鉾今に傳はり社寶として保存す。

其の後松本の城主小笠原氏を始め水野氏、松平氏（戸田氏）等の名族、世々崇敬絶へず。

(一)天正十年八月小笠原貞慶氏、松本城主となりしより宮城祈願使として家老職を、年々參詣せしめ小笠原御祈願使と云ふ。此の御祈願使の名古老に傳へ來りて、今尚ほ高齢者の語る所なり。

(二)元祿十六癸未年三月同城主水野隼人正忠直氏、定紋附（花瀧紋）の幕を奉納せられありたりしが破損につき、明治三十五年十月子爵水野忠敬氏同家の記錄によりて同幕を改調奉納す。（社寶中に保存せり）

(三)安永三甲午年十月同城主松平丹波守光和氏、同家定紋附（六星紋）の幕を奉納せられ、（社寶中に保存せり）且同家に於て今日迄時々幣帛料、及び初穗料を寄せ越さる。

第六、社殿の沿革

當神社の沿革に關しては、舊記散逸して之を序述する由なし。當國志誌の所傳も亦缺漏多し。然れども古老の口碑と殘存の記錄とにより、玆に其の大要を引證すべし。

孝元天皇五年社營奉齋の後、當國宮城（有明山麓）と稱する所に魏磯城（或は義鬼死）（信濃夷）北方より來りて居住し、神社を燒亡し佛閣を破壞し、里人を捕攫し家物を掠奪し、横暴を極むる事年久しく、轉々移住して萬民を惱亂せしめ、當社も其の難に遭遇したり。玆に於てか坂上將軍田村麿造營せしめらる。

信府統記曰

往古郡ノ號モ定ラズ、況ヤ鄕村モ開ケザリシ時適々アル所ノ人家ハ山ニノミ住セリ云々、中房

山（有明山ノ麓）ト云フ所ニ鬼賊アリテ、國人ノ仇トナリ、神社佛閣ヲ破壞シ、民家を燒亡シ亂暴年久シ。其名ヲ魏石鬼トと云ヒ、又ハ八面大王ト云フ。坂上田村麿是ヲ征伐ス。田村利仁將軍ハ、桓武天皇ノ御宇ノ人ニテ、延曆年中東夷ヲ征セシコト數度ナリ。コノ時ノ中ナルベシ。但シ信濃國ニ於テ、夷賊ヲ平ゲラレシコト、慥ナル說ハ見エザレドモ云々。松川與宮城ト云フ所ニカノ魏石鬼ガ窟トテ今ニアリ。四方四五間、磐石ニテ疊ミ天井モ大石ナリ。其上ハ山ニシテ、草木ヲ生ズ。此外彼邊ノ山々ニ窟アリ。又矢澤入ノ山中谷間ニ大石ノ角ニ切リタルアリ。長サ二間厚サ一尺四五寸ニテ一尺許ノ石數多積重ネタリ。此谷狹地ニシテ大勢ノ人夫働クベキ所ニアラズ彼石一個ヲ二三百人ニテモ持難キ程ナリ、然レバ人力ノ及ブ所ニアラズ鬼賊ノ事跡ト言傳フ。云々（以下は第五貴族の尊崇の條に引證しあれば玆に略く）

（註）

○太古に於て穴居生活を營める種族中に信濃蝦夷なるものあり。其の一部民相集りて鼠の窟に住めり。今の鼠穴は卽ち此の地に當れり。現在竪穴穴居の跡歷然たり鼠穴は有明山麓の地宮城に隣接し隱鼻と稱する小山の出先を以て僅かに境す、八面大王は此の信濃蝦夷の末流にして、田村將軍の追窮に遇ひ鼠穴を棄て宮城に移り魏磯城の窟に籠れるも畢竟鄕土愛着の情の然らしめたるものか。

又此の前後に於て、安曇氏、犬養氏、阿智氏等の諸族、屢々造營修繕等せりと云へど、年代人名等詳かならず。中世仁科氏の所領に屬せしより、同家に於て營作を施さる。

承久三年地頭を置かれて以來、應仁已後に至るまでの事情は、亂離相續きたりし故にや當社舊紀の外村中舊家の記錄等更に所見なくして詳細に知る事能はざるは遺憾なり。

信府統記、千曲の眞砂、信濃國誌等に、木會義仲兵を擧げし以來、應仁亂後、織田豐臣兩氏が季世まで、國中騷然たりし爲、鄕氏安堵せざりし事項は枚擧するに遑あらず。故に、今一々之を引證せず。

德川氏の時に當りては、鎌倉以後豐臣氏以上の時態に擬ひ、社領は充行はれざりしかども、領主をして夫々應分の手當をなさしめらる。

明治二十一年故大教正岡村阜一氏深く本社の衰頽を歎き、切りに有志の間を遊說し社殿を增營して輪奐の美を極め、神境を廣うして四時の花卉を植ゑたれば、崇嚴と華麗と兩つながら備はるに至り、世人呼んで信濃日光と稱し、信徒頻りに增して、遠近無慮數萬を算するを見る。

げにや、山上、山麓に鎭まり坐す三柱の神靈や果して如何に欝すらん。

附、

田村將軍信濃國下向の事蹟を參考として玆に引證す。

一南安曇郡東穗高村（式內）縣社穗高神社緣起による時は、人皇四十九代、光仁天皇の御宇、義死鬼と云ふ東夷、神領を掠め宮社を燒亡し、萬民を惱亂せしめしに依て、桓武天皇の勅令にて延曆年中田村利仁、東夷を追討す云々、とあり。

一同郡西穗高村栗尾滿願寺緣起、善光寺道名所圖會による時は延暦十四年坂上田村將軍中房山の賊を退治云々とあり。

一同郡有明村宮城不動堂緣起、長野縣統計書による時は延暦二十年坂上田村麿の草創なりとあり。

一同所五龍山明王院緣起、幽谷餘韻によるときは大同元年坂上田村麿有明山の賊を誅し云々とあり。

一北安曇郡平村大澤寺緣起によるときは延暦二十四年坂上田村麿の建立なりとあり。

一同郡社村源花山盛蓮寺緣起。信府統記によるときは大同四年坂上田村麿利仁將軍觀音堂建立云々とあり。

一東筑摩郡松本市筑摩神社(縣社)由緒、善光寺道名所圖會によるときは此宮大同中坂上田村麿の創立なりと傳ふれども延喜式内に列せざるは不審なりとあり。

一同郡鹽尻村(式内)鄕社阿禮神社由緒によるときは、大同二年兇賊あり、安曇郡有明山の嶮に據り以て王命を拒む。平城帝、坂上田村麿に敕し之を討しむ云々とあり。

一同郡島立村三の宮縣社式内沙田神社由緒によるときは、大同年間田村將車勅命により、有明山の妖賊を討ち平く云々とあり。

一同郡東川手村小瀨村社神明宮由緒によるときは、延暦年中、田村將軍朝命を奉し、東征の時此の地に入り戰捷を祈り云々とあり。

一小縣郡泉田村大日堂緣起、長野縣統計書によるときは延暦十六年坂上田村麿の建立なりとあり。

一同　同村驚覺山高仙寺緣起による時は、大同元年征夷大將軍坂上の田村麿の建立なりとあり。

一同郡浦里村一乘山觀音院大法寺緣起によるときは、大同元年坂上田村麿の建立に係る云々とあり。

其の他當國數多の神社、寺院等の由緒及び緣起に記載しあるも何れも大同小異につき玆に省略す。

信府統記曰

有明ノ里ヲ仁科ト號セシモ此時ヨリノ名ナリ鬼賊仁ノ科(トガ)トナリタル義ヲ以テ田村麿ノ名付ラレシトカヤ云々、將軍逗留ノ間ニ、當郡三年ノ貢ヲ赦サル、是人民彼賊ノ爲ニ惱サレテ困窮セシガ故ナリ。此厚恩ニ國人等將軍ノ武運長久ノ祈禱トシテ、神社佛閣ヲ所々ニ建立シテ、田村將軍ノ建立ト札ヲ書キ納メケルトナリ、今ニ至テ田村ノ建立ニテ開基セリト云ヒ傳フル寺社多キ事ハ此故ナリ云々。

第七、寶　物

當神社の寶庫に保有する所の現存寶物左の如し。

其の一、貴族の奉納に係るもの（第五、貴族の尊崇の條中に掲記しあるものなり。）（口繪參照）

一古代刀劍	一振	長サ三尺五寸、	大同元年將軍坂上田村麿納付ス
一同　曲玉	一個	赤色、	同　上、
一同　管玉	四個	青色、	同　上、
一同　紫玉	二個	紫色、	同　上、
一同　白玉	二個	白色六角形、	同　上、
一同　金環	二個		同　上、
一同　裝束品	一個	楕圓形にて、鐵製の金掛、	同　上、
一同　齋甕	一個	圓形ノ土器、高五寸、口徑二寸三分、	同　上、
一後鳥羽院御製	一面	懷紙寫、	承久三年後鳥羽院、仁科盛遠なして納付せしむ、
一太刀	一振	長二尺一寸一分、	鍛冶官大隅權守久國の作　同　上、

一鉾	三本	木製、	弘安九年仁科氏納付す。
一幕	一張	花蔦紋付、	水野家の納付、
一同	一張	大星の紋付、	戸田家の納付、
一燈明臺	一對	眞鍮製、角形、高二尺四寸	島津若浦寒納、

其の二、古　器　物

一古代の曲玉	二個	青色一寸三分　赤色一寸一分	作者傳來等未詳、
一古代の管玉	五個	青色、自一寸至六分	同　上
一古代の紫玉	一個	紫色、	同　上、
一古代の白玉	二個	白色の六角形	同　上、
一古代の金環	二個		同　上、
一古代の勳章	一個	八の旭光形にて鐵製の金掛、徑三寸二分	同　上、
一古代の裝束品	一個	楕圓形にて鐵製の金掛け、長參寸九分、幅壹寸九分	同　上、
一曲玉壺　蓋付	二個	口徑大六寸、小五寸五分、高大一寸三分、小一寸三分	同　上、
一古代平抔	二個	口徑大四寸九分、小四寸五分、高大一寸三分、小一寸三分	同　上、

一古代の石笛　一個　長三寸二分幅一寸九分、石器、　古代より當社に保存す
一同　雷斧　一個　長七寸六分、幅三寸、石器、　同　上、
一同　玉磨石四石　一個　幅八寸に七寸、厚三寸二分、石器、　同　上、
一同　刀劍　一振　長二尺三寸　同　上、
一同　齋甕　一個　高八寸七分、周圍一尺九寸、口徑二寸一分土器鼠色堅燒、　明治十九年祝部塚附近の古墳より發見せしもの
一同　高杯　一個　高四寸二分、周圍一尺四寸五分口徑四寸、土器、同上、　同　上、
一同　忌瓮　一個　高五寸八分、周圍一尺二寸九分口徑一寸九分、土器、同上、　同　上、
一同　同　一個　高六寸七分、周圍一尺五寸七分口徑一寸九分、土器、同上、　同　上、
一同　同　一個　高五寸六分、周圍二尺二寸土器、堅燒、　同　上、
一同　同　一個　高サ四寸五分、周圍一尺二寸五分、口徑二寸六分、土器、赤色素燒、　同　上、
一同　高杯　一個　高サ六寸七分、周圍二尺、口徑四寸五分、土器、同上、　同　上、
一同　缶　二個　高サ一寸五分、周圍七寸五分、口徑四寸、土器堅燒、　同　上、
一同　曲玉壺の蓋　一個　口徑六寸、土器同上、　同　上、

其の三、武器類

一節刀　一振　身長一尺七分、總長一尺五寸二分、　栗田口忠吉作
一古刀　一振　身長二尺二寸八分、　江洲高木住貞宗作
一同　一振　身長二尺四寸、　備前長船住則光作
一同　一振　身長一尺九寸八分、　宗久作
一同　一振　身長二尺五分、　來國光作
一同　一振　身長七寸七分、總長九寸九分、　三條小鍛冶宗親作
一同　一振　身長一尺二寸、　作者未詳
一刀　一振　身長一尺九寸四分、　鐵成作
一同　一振　身長二尺二寸、　陸奥守兼光作
一同　一振　身長二尺三寸三分、　神臨齋山口保國作
一同　一振　身長八寸五分、　作者未詳
一同　一振　身長一尺九分、　作者未詳
一同　一振　身長六寸五分、　作者未詳
一長卷　一振　身長三尺五分、柄長四尺三寸五分、　津輕住紀正貞作

一鎗　身長二尺一寸、柄長六尺四寸、　廣吉作
一同　身長六寸、柄長一丈六尺、　作者未詳
一大弓　長七尺二寸九分、　作者未詳
一矢　長二尺九寸、　作者未詳
一甲冑　黑皮縅、泥鍍、鎧櫃付長一尺七寸五分　作者未詳
一同　脛當付、方一尺三寸　作者未詳
一縮　同　上　作者未詳
一陣羽織　毛氈地、金欄襟、丈々二尺七寸　作者未詳
一陣笠　紙張拔製、黑漆　作者未詳
一野行羽織　麻織地、丈々三尺
一鎖夏衣　錫銅作、手甲付、丈々二尺四寸三分、

其の四、戰利品、(記念)、

一榴彈　長五寸五分、徑二寸五分、　明治二十七八年戰役戰利品　長野縣奉納
一軍衣　長二尺五寸、毛織物太絲付、同上、　同上、
一同　長三尺四寸、羅紗地、　同上、

一戰利品奉納記　一通　明治四十年三月陸軍大臣寺內正毅奉納ス
一砲彈　一個　長九寸四分、徑三寸四分、　明治三十七八年戰利品記念　同上奉納
一同　一個　長五寸二分、徑二寸五分、同上　同上奉納
一挺　一個　鐵棒の八角、長三尺一寸、同上　同上奉納
一方匙　一個　鐵製、木柄付、長一尺七寸、同上　同上奉納

其の五、文書及畫類

一殘月集　一部　明治三十年八月一日發行、　有明山を題する和歌及詩集、
一御沙汰書　一通　殘月集獻納の證、　明治三十年十月十二日宮內大臣より下賜
一卷軸　一卷　紙本、誕生蓂目之次第、　小笠原大膳太夫長時書
一色紙帖　四部　折本製、和歌の色紙を張り込、　何れも有明山を題したる和歌なり、獻詠者は別に記す
一短冊帖　八部　折本製、和歌の短冊を張り込、　同　上
一卷軸　一卷　絹本、有明山十二詩　巖谷修筆
一同　一卷　紙本、有明山祭神記、　臨犀筆
一畫幅　齊守宣圖　一幅　紙本、　長谷川雪貢筆

一書幅　詩　一幅　絹本、　翔山老人筆
一書幅　和歌　一同　紙本、有明山を題したる歌、　長門守平景樹筆
一同　神號　一幅　絹本、　稲葉正邦筆
一同　勅語　一幅　紙本、　長英筆
一同　望岳賦　一幅　紙本、大幅、　象山平啓子明筆
一同　和歌　一幅　紙本、　前大納言爲家筆
一同　詩　一幅　紙本、　中村正直筆
一同　詩　一幅　絹本、題有明山、　武居用拙筆
一同　詩　一幅　紙本、題有明山、　松原衞筆
一畫幅　芭蕉肖像　一幅　紙本、　無爲洞雪筆
一圖幅　裕明門圖　一幅　紙本、　清水虎吉筆
一同　同上　一幅　紙本、　山口權之亟筆
一畫幅　山水　一幅　絹本、　藤森桂谷筆
一同　祭式圖　一幅　絹本、　長谷川雪旦筆

一書幅　詩　一幅　紙本、題有明山、　雪峯林陳筆
一同　詩　一幅　紙本、　松嵐筆
一同　詩　一幅　紙本、　茅原清筆
一畫幅　詩畫　一幅　紙本、　十返舍一九筆
一相撲免狀　一通　紙本、　浦風林右衞門筆
一信名濃日記　一部　當社參拜日記、　松波遊山著、矢野口三郎發行
一額面　有明山社景圖　一面　縱三尺七寸、横七尺八寸、木製　村田香谷筆
一同　連戟連捷圖　一面　同　上、　藤森桂谷筆
一同　後鳥羽院御製縱一面　縱三尺五寸、横七尺一寸、木製　松波遊山筆
一同　和歌　一面　紙本、緣付、　冷泉家筆
一同　書　一面　同　上、　西嶋筆
一同　詩　一面　同上、題有明山、　雪逢林陳筆

其の六、前項以外の貴重品

一神鏡　臺附、　一面　銅製、丸形

一同　一面　同上、徑五寸九分　因幡守義信作

一古代鏡　一面　同上、徑五寸一分　作者未詳

一八咫鏡　一面　同上、八角形、徑一寸八分　作者未詳

一榊掛の鏡　一面　徑一寸八分、　作者未詳

一同　玉　一面　曲玉十個、管玉十一個、丸玉二十個、　作者未詳

一同　劒　一振　長八寸八分、　作者未詳

一隨神　二證　青銅、高サ五尺　濱豬久馬濱鐵一合作

一同　二體　木製、高サ三尺一寸　山口權造作

一神馬　二體　木製、高サ三尺六寸　伊藤幸太郎作

一和鎌　一丁　刃渡り九寸五分、　作者未詳

一古錢　一個　開元通寶、　作者未詳

一古玉　一個　玉石の丸形、瑠璃色、　作者未詳

一古代面　一面　木製、翁面、長サ七寸四分　作者未詳

一額面　彫刻　一面　木製、天孫降臨の圖、　縱三尺五寸、横六尺四寸、原田蒼溪の刀

一同　一面　本製、御酒德利の圖、　縱五尺六寸、横三尺二寸

一同　一面　古錢の劍形、　作者未詳

一神鈴　一個　銅製の丸形、高二尺、徑一尺三寸　臨犀筆

一四神旗　四旒　絹製、　作者未詳

一神樂鈴　三個　作者未詳

一神樂面　彫刻　七面　木製　作者未詳

一抔　一個　土器の定紋付、口徑二寸五分、　明治二十五年五月二日子爵戸田康泰夫人芳子參拜奉納

一木抔　一個　朱塗、口徑二寸五分、　長野縣知事下賜

一火焔太鼓　一個　雷神繪畫、徑一尺七寸　作者未詳

一鉾　一本　眞鍮の鐏附　作者未詳

一鍬柄　一丁　木製、上棟式記念　作者未詳

一槌　二個　同上、同上、　作者未詳

一幣帛柄　二個　同上、黑塗、祭事用　作者未詳

一筌　一管　竹製　作者未詳

一士佐冠　一個　古代用、鳥形、　作者未詳

一富神壽寶　一個　惠比壽大黑像、銅製、高サ一寸　古錢に取り付あり

一高足膳　一脚　木製、黑塗、方九寸八分　作者未詳

一棟札　一枚　本殿正遷宮の棟札、　天保三年三月十七日耳塚村庄屋林善兵衛外五ヶ村庄屋及與頭納附

一五郎八茶椀　一個　土器、深サ三寸、口徑六寸六分、　作者未詳

一初代の鐵瓶　一個　高サ四寸二分、口徑三寸一分　蓋付、周圍一尺六寸六分、作者未詳

一菅公像　彫刻　一體　高臺共七寸四分、身長六寸五分　作者未詳

一古印　一個　銅製、人物の握、高五寸四分、徑一寸八分五厘　作者未詳

一鎖夏衣　一着　錫銅作、手甲付、

一鏡　一面　銅製、至六寸六分　藤原光政作

一南鐐銀　一個　方八分、五分、　作者未詳

一野行胸當　一着　麻織地、石帶附、　鶴の丸紋付、丈一尺七寸五分　作者未詳

其の七、寶物の附記

寶物中の色紙帳短冊帳に貼綴れる色紙及短冊は明治二十四年四月十三日當社殿に於て擧行したる和歌

獻詠式に出詠せし有明山を題す和歌の眞筆なり。今其の獻詠に係る人々を左に掲げむ。

色紙帳 官職位爵は本歌獻詠の當時を記し爾後昇進轉免は總て改訂を加へず、

從二位侯爵	久我通久
從三位侯爵	前田利嗣
從二位伯爵	東久世通禧
正三位伯爵	佐々木高行
正三位伯爵	園基祥
正三位伯爵	松浦詮
從三位伯爵	津輕承昭
從三位伯爵	冷泉爲紀
正四位伯爵	勸修寺顯允
從三位子爵	福羽美靜
從三位子爵	黑田清綱
從三位子爵	稻葉正邦

正四位子爵　冷泉爲柔
正四位子爵　氷川神社宮司　風早公紀
從四位子爵　增山正治
從四位子爵　伊東祐歸
正五位子爵　水野忠敬
正五位子爵　前田利昭
正五位子爵　北小路俊親
正五位子爵　本田忠貫
正五位子爵　六條有熙
從三位男爵　高崎正風
從三位男爵　千家尊福
正三位　郷純造
從三位　長谷信成
從三位　梅溪通治
從三位　永山盛輝
正五位男爵　牧岡並に大鳥神社宮司　津守國美
正五位男爵　松木彦
正五位男爵　宇佐神社宮司　到津公誼
正五位男爵　同　宮司　成矩
正五位男爵　日前並に國縣神社宮司　紀高俊
從四位　丸岡莞爾
正五位　藤井行德
正五位　三室戸治光
從五位　小中村清矩
從五位　神宮宮司　鹿島則文
從五位　鈴木重嶺
從五位　諏訪忠元

○

正五位　柳原愛子
正六位　千種任子
從六位　税所敦子
正七位　姉小路良子
正七位　小池道子
正七位　北島いと子
前田侯爵夫人　前田朗子
鍋島侯爵夫人　鍋島榮子
増山子爵祖母　増山深雪子
同　母　増山きみ子
黒川男爵女　黒川千春子
○御歌所
從六位　黒川眞頼
正七位　谷　勤

短冊帳

○東京

三田葆光　岡部長民　木村正養　貴島磯麿
大教正本居豐穎　北郷久政　松波資之　橘道守
江刺恒久　揖宿近春　加藤安彦　水原史郎
井上賴文　三輪義方　芝葛鎮　鋤柄清雄
久間楳翁　岡田三生　青木修　吉川田鶴雄
逸見仲三郎　鶴久光　稲葉正利　白崎安邦

正八位　植松有經　小出粲　内藤存守　坂正臣　鎌田正夫　大口鯛二

松室常保　小原秀眞　豐時隣　上田就將

豐喜秋　三本貞健　新一路　加藤亮

小島弘道　松本正利　櫻井光裕　森知道

星重之　小寺直擧　鶴久子　水原未磋子

同良子　同すや子　服部磯子　芝まの子

丹羽淺香子　丹羽環子　戸田つや子　小林眞子

大庭花子　山田多喜子　山田梅子　櫻井歳子

秋田九萬子

○京都

赤松祐以　中西石陰　園美蔭　尾崎宍夫

遠藤千胤　鹿野享利　平野素壽　福田祐藩

大久保俊雄　光明智曉　池坊專正　高砂兼（九十三翁）

前田有之　村上和光　堀辭仙　尾崎忠恕

北村正義　望月一居　松田長敎　中出利觀

幾田光景　木島周吉　三上明啓　吉川正次

苗村義一　岡村直溫　山田良金　木村文邦

腰山重剛　木村巖　木島嘉一　芳村義臣

廣田常吉　原元良　僧月泉　大八木眞狹

森井華胥　藤田幸海　山田當明　福原俊彥

青谷惟重　進藤定明　上野愛古　中川長雄

西岸練英　東山隨雲　田中春蔭　久保田雅

瀧祐平　矢島釣　遠藤全明　菱田孝祺

西垣清生　高屋德賢　勝田一清　伊東貢

山本正意　木下玉蘭　中西濤子　藤井愛子

高屋光子　中出ゆう子　中出さた子　眞野まさ子

○大阪

北畠光家　滋岡從長　彈琴緒　園八尋

寺井種清　雲林院雲堂（八十五翁）　加藤小自在（七十六翁）　牧田尙賢

吉田健次　狩野宗抃　加藤景延　清水眞幸
保原正量　眞川本雄　石井貞生　佐々木美彦
豊浦年信　稲葉素貞　三瓶養　石川千春
吉田業忠　山縣白英　秀正義　安井朗安
三宅茂樹　井上景明　伊藤高庸　齋藤勝載
澤美清　荒川自詮　桐山守長　野呂瀨曉月
藤森重慶　佐伯眞彦　佐伯眞區　奥村吳巷
河野堯惠　栗山善翁　宮本豐文　山東雪溪
松川庸興　榎谷知雄　小川雄璟　木村良隆
杉浦利平　土居御調　澁川博盛　加納鶴處
人見秀一　佐藤正鹹　景井美德　山田淳子
滋岡八千子　藤田一子　伊藤濤子　厨川せい子
右近しつの子　久世桂子　山田隆子　鮭延端子
大濱壽雄子　平野友子　櫻井貞子　小倉より子

林　楳子　新堀百合子　中島永次
○山城國　男山八幡宮官司　男山八幡宮國宜　權中教正　長谷川義道
松原貴速　辻村豐富　多貝尚行
與謝野尚綱　權僧正　毘尼薩台巖　中小路宗城
岡本貞幹　石原方義　高橋祐孚
林木積　高橋徹　日下俊隆
立光日圓　河合義耀　津山貞行
鳥居眞成　佐野靡　藤木重義
神原蓮阿　糸谷秀氣　椹木有穀
○大和國　大僧正　革島有方
藤村叡運　柳原春彦　小堀大觀
小石野茂
山田義顯　淺井數子　澤井信子
○河内國　中西民子
○和泉國

高山慶孝　山田清雄

○攝津國

阿部野神社宮司
渡邊資政　野口義貫

堀重俊　宮本休義

喜多ゆき子　渡邉須惠子

○伊賀國

教賀神社宮司
三田村嘉正　杉井吉從

中村正元　譽田茂樹

富田宗光

○伊勢國

神宮禰宜
東吉貞　神宮禰宜
中田正朔

今久保作樂　山田武藏

○志摩國

大西眞直　大西眞守

宮本時夫　藪橘園

吉田好信　久保松照映

乾坤　七十八翁
福田召應

奥瀨英壽　富山惟穆

同權禰宜
二宮嚴樞　森正喬

坂八千子　山田なか子

谷川原眞彦　谷川原眞文

○尾張國

林陸夫　小牢田盛延

加藤吉啓　櫛田利眞

內田成之　矢部典則

福田賴實　森長明

久野春章　櫛田利和

竹田晨春　堀田貞我

松平忠典　大島爲知

水野忠順　寺尾爲英

鬼頭美樹　山本有壽

柴山明　鈴木充慶

加藤千之　敷島章甫

小笠原嚴實　伊藤雅好

久間有孝　久間有隣

織田豐秋　木原清香

寺倉古史　竹田晨正

山本正晴　加藤重義

金原知彥　田中俊房

舍人經營　竹田載守

中島可進　前島長發

稻村爲胤　佐々木義高

森員樹　毛利義保

水野浩　花木義幸

小笠原師滿　友松春房

酒井忠近　高松定輔

宮崎東一　宮崎銘二

加藤昌賢　青木茂

山田千町　城野之信　水谷爲就　伊藤清介
大井羽輕　森田宣辰　朝岡正備　種村有年
鹿島安行　森川賴次　櫻井しけのふ　森本佳成
加藤正國　杉山長儁　加藤巖　前田直行
杉山利光　丹羽漸　小川正雄　伊藤千浪
神野古道　水野武彦　梶川高敏　鈴木重富
竹川清　加藤清歳　今村成敏　鈴木惠保
佐藤友政　津田良晁　宮崎鈴子　中川富貴子
杉山ふさ子　加藤やす子　加藤もと子　伊藤信行
岡山高蔭　橋本守稠　河村新晤　服部居敬
長岡秋道　木造貞門　磯谷報阿　服部本恭
鈴木胤重　溝口陽隆　竹田晨明　丹羽消雲
後藤基清　石川正基　石川正德　岡島有庸
松本包高　堀田茂雄　眞野綱一　堀田篤之

服部玉升　服部安長　村主宗治　堀内之武
渡邊爲綱　大橋靖　眞野益綱　鈴木弘成
大橋露靜　柏木知貞　佐野方直　野邸蕃
永田明足　平野長幹　櫻木含英　石黒正貫
早川千萩　長谷川源　横井時逸

○三河國

柴田顯光　竹尾正久　永井千丈　大澤重熙
落合伊正　近藤素平　成瀨廣冬　跡堀信成
佐藤三郎九　成瀨義重　金山良平　竹村有茂
大橋景足　河合成章　富田良穗　都築清晉
齋藤致純　山本松二　宮路寧雅　宮道貞吉
小池義一　小野田溫道　龜井重範　柴田宗昌
渡邊半藏　大澤德三郎　杉浦重禎　渡邊慧顯
遊佐美香　黑木樹三郎　山内愛治　杉浦法道

奥村孝成　木俣周平　大竹海道　阿知波安眞

岩瀨依重　奥山寛道　梅村伊佐武　梶田春嶂

古澤晥胤　多田清廣　大伴彰　白井朝親

田中定宣　市川英棟　浦野孝貞　天野美正

大森信允　竹田佳孝　早川滿之　渡邊經忠

寺部與吉　竹中文治　淺沼道堅　竹尾小笹子

加治米子　鈴木かね子　近藤とら子

○遠江國

岡部政美　岡田水江　木村八十雄

權少教正
渡邊隼雄

○駿河國

淺間神社禰宜
中込榮枝

○甲斐國

○伊豆國

三島神社宮司
秋山光條　飯田守年　飯田庸雄　鈴木八東

石井成齊　鈴木忠尙　杉山信安　柳生策子

秋山やす子　河邊雪子　小林久子　河邊好子

○相模國

丹羽與三郎

○武藏國

權中教正
平尾其峯　氷川神社主典
磯部重浪　富澤政恕　猪俣陽州

松井巖　中原文質　飯野克明　安齊春州

尾上眞路　新井政毅　金井郡治　片柳宮衛

盲者
矢島要　鳥羽審盛　吉田春影　入十オ
安齋のり子

富澤たか子　小坂多餘子

○安房國

安房神社禰宜
岡島義鑑　岡島公行

○上總國

鴇田重榮　實方一葉

○下總國

中村計以子

○常陸國

眞柄兼　鹿島神社宮司 大谷秀實　鹿島神社祠官 北條時成　權少教正 金田伊訓

鹿島幹命　吉田善教　坂入昌永　石島嘉平

宮田榮　宮內榮　野手美知子　中山眞子

中山都宇子

○近江國

多賀神社宮司 宇津木久岑　多賀神社祠官 大口祀善　岩崎宗德　久郷東翁

竹村定功　柏原みつ子

○美濃國

權大教正 棚橋碌々翁　豐島夏海　長間眞道　高橋有道

鹽谷幸滿　片桐春好　中北勤解雄　橫山鈴齊

賀島重遠　石原胤豐　橫井正壽　菱田重寬

渡邊俊明　碓井圓空　武井芳矩　小島蔦子

近藤暢子　青木まさを　吉田しむ子

○飛驒國

水無瀨神社宮司 大地眞澄　山崎弓雄　富田豐彥　藤江文吾

○上野國

駒井眞蔭　根岸松齡　二渡信經　大橋家壽

田島尋枝　松田都可佐　西村幸道　釋貞信

淺井貞光　淺野長義　田島祐喜代　新井澄雄

島田胤平　新井康道　深井仁子　深井錄子

柳下菊江子　天野粂子　那須あき子　大澤幸子

○下野國

東照宮兼二荒山神社祠官 早尾海雄

○磐城國

有本久光　井上米壽　中村久美　石井勝富
柿沼幸永　關留五郎　矢田重知　芳賀元有
西山尙德　井上光一　多賀谷經通　岩淵重智
小野誠貞　角田爲松　宗田映盈　鈴木まる子
石崎榮子

○岩代國

壬生惠詮　矢内光門　安齊光俊　坂本雪豐

○陸前國

豐原春芳　豐原清美　熊谷花月　伊藤祐彦
大友幸知　伊藤政則　皆川芳秀　佐藤專信
豐原つるよ子　伊勢武子

駒形神社宮司
島川竹介　及川良壽　小原奥風　坂野元常
菅光風　笠神芳穗　餘目一葉　千葉政人

○陸中國

倭人　政重　高橋蛙聲　三戸貞次
田代直行　坂上御翳　平井德彌　田代元雄
星美登子　伊藤笹子　阿部竹代子　菅好子
田代松廼子　田代八千代子

岩木山神社宮司
長利仲聰　同主典
齋藤修吾　畠山和風

○陸奥國

月山出羽湯殿山三神社宮司
朝比奈泰吉　同主典
宮下正勝　權中教正
星川清晃　眞田達孝

○羽前國

寺岡儀一　菅原長彌

○羽後國

大物忌神社宮司
筒井明俊　同主典
畠山成重　松田貫作　乾滿昭
清水元　加納利亮　年久惠文　長谷川健治

○越前國

氣比神社禰宜
脇屋嶺容　今村彦十郎　菊澤正秋　山田正秋

河野親成　平松周玄
石塚資雄　護城一成　川端親禮

○加賀國
石川昌三郎　白山比咩神社宮司　横山政和　白山比咩神社禰宜　戚瀬正居　同主典　菊池武及
高橋富兄

○能登國
氣多神社宮司　加藤里路　同禰宜　櫻井基正　同主典　櫻井基朝

○越中國
加藤里衛　宮島巖

○越後國
島山成章

○佐渡國
度津神社宮司　美濃部槙　同禰宜　藏田信中

○丹波國

能勢頼保　加賀山寛道

○丹後國
佐々木高一　佐々木高秀　中村言喜
山田足穂　粟飯原信子　平田丹海　坂根富淳

○但馬國
臼田蒼生比古　日下部正滿　内藤勝長

○因幡國
伊谷野冬雄　宇倍神社禰宜　榎本寛　河瀬摠　小谷芳蔭
高宮操　田中俊民　小山宣行
城ノ秀保　岩本愛子　乙子

○伯耆國
住田正懿

○出雲國
能野神社宮司　有澤弐恒　村上正雄　山下安祥　羽山繁樹

田中白鷗　船越一好
井川貞善　仙田守夫
山本やう子

物部神社禰宜
○石見國
庵原政齋

○隱岐國
木若酢神社宮司
忌部正弘　同主典 菊地親信

○播磨國
梅神社宮司
上月豐蔭　同禰宜 永田成訓

廣瀨高賴

○美作國
黑住教管長
黑住宗敬

石黑良規　藤森恒景

○備前國
黑住宗武

森井中圓　伊藤博敎
志立齊圓　村上安子

森本與惣　岡春範　片岡寛
加藤秀徹　日比邦光　荒木村氏
杉山吉承　柳瀨直孝　田中知昭
宇野重幸　村岡誠實　安宅泉
小野峨洋　高柳秀成　片岡光子

吉備津神社宮司
○備中國
尾形嚴彥　同禰宜 藤井嚴

藤井房雄　藤井廣蔭

沼名前神社宮司
○備後國
中島博光　同禰宜 佐原義民

中島綾子　藤井重古

嚴島神社禰宜
○安藝國
木村子敬　同主典 野坂元隆

○周防國

田中意氣揚
河本益二
中堀直秋
赤木正陽
黑住陞子

同主典
山本三郎
木山清名

同主典
三島貞之
正木昌明

野上貞勝
林親德

今田寛　松田繁藏　佐伯美敬

矢田部善信　松田たけ子　矢田部與一

○長門國

板垣義成　住吉神社禰宜 中村珍成　住吉神社禰宜 許田杏平　安原滕壽

田上陳鴻　國司直記　中川涼介

○紀伊國

日前國懸神社禰宜 矢田部弘典　同主典 武川安光　同主典 島田秀勝　裏川里平

○淡路國

伊弉諾神社宮司 乃美宣　同禰宜 岩政隣德　同主典 藤田等

○阿波國

大麻比古忌部二神社宮司 川田秀穎　同禰宜 福本祇意　同主典 香川美敬

○讃岐國

權少教正 赤澤龍江　小田景升

○伊豫國

○土佐國

朝見豫麿　眞鍋家愛　佐伯眞海

島村雅規　小林泉　林茂門　桑名淳素

依岡珍麿　監二　澤谷凌雲　大塚恭齋

長谷川龜子　伊藤津世子　島田くす子　楠瀨千屋子

谷田磯子

○筑前國

宗像神社宮司 倉入隣　古川勝隆

○筑後國

村上治義　菊池逸士　生形逸雄　西原爲吉

中尾猛虎

○豐前國

鶴我盛一　百策恒心

○豐後國

西寒多神社宮司 毛利登　同禰宜 矢野義和　同主典 藤田直夫　六八 同主典 安東敏雄

野田力

教正 ○肥前國
中島廣行　權少教正 片山幽叟　鈴木春秀　田島定種
香月薫平　半島秀實　飯田三七郎　足立正枝
風間由美雄　田島定五郎　岩淵永　松本孝平
守彦　足立みつ尾子

權中教正 ○肥後國
佐々豐水　稲田慈竹　長瀨正武　大森知足
長野守弘　横山新藏　江上恒英　今井正規
井口尊德　杉本彦治　妹尾蓮臺　西澤靜春尼
大森峯子　江上勝子　由子　小井手とゐ子

○日向國
高橋苦石

○大隅國
鹿兒島神社禰宜 石原久雄　伊地知季遠　高野一介　小田歡治

○薩摩國
和泉秀武

○壹岐國
川畑梓　山口利雄　加治木常樹

住吉神社宮司 三角千金　松本義臣

○對馬國
海神々社宮司 佐賀和一　同主典 蕃建明烈

○琉球國
護得久朝常　護得久朝置　護得久朝惟　伊是名朝睦
麻文仁朝位　譜久山朝宜　譜久山朝鋪　本村朝昭
眞喜屋實眞　野村安暢　備瀨知克　名城嗣知
前田道美　酒井豐明　高木太郎　加藤義意

大久保茂政　德屋顯伸　津川房美

○後志國

大竹元一　藤野利定　佐藤岡堂　星野三郎

飯野直枝　實相寺利氏　野村松叟

○石狩國

江良千里

○膽振國

三橋中雄　遠藤時哉

○信濃國、水内

戸隱神社宮司 久山理安　荒木利定　中野重雩　好川景章

松澤正澄　落合壽久　神原壽丸　成田觀成

○同　埴科

菅春風　菅眞行　唐木善武　米澤千稻

色部義里　碓田道行　金井貞通　宮本淺

神尾尙方　日下部保堅　小幡龍蟄　久保田操

○同　小縣

神尾成教　池田宗志　廣瀨舍賴　松井正恒

鷲見保誠　山田芳居　三井經貞　關口道彥

○同　佐久

田中則之　並木信明　木内政樹　仁科英慶

小林義邦　金子喜一　阿部因　阿部信通

由井うめ子

○同　伊那

林猛雄　小町谷杉園

○同　諏訪

諏訪神社禰宜 岩本尙賢　牛山利城　矢島尙文

守矢ゆた子　守矢親興

○同　筑摩

小山進　横内捨一郎　權少教正宮本兼敬　武藤清博　清水義壽　松澤吉寶　三浦義遵　高橋良休　增田盛長　淺井冽　河野通重　今泉親光　青木道海　川船高純　三原明樹　中澤連樹　寺村安憲　藤江正明　增田眞和　增田守信　柵橋保春　堀金文之　深瀨元平　縣直七　佐々木きみ子　寺田伊佐子　加藤登志子　寺田並子

窪田畔夫　松本敬基　佐々木了綱　池田正誠　恩田權太郎　大和辭　加藤知基　大輪鐵石　增田重義　與曾井梅麿　百瀨素氏　金井增壽　市川しう子　市川ます子

七二　少教正樋口容嶽　宮澤繁房　德山賴廣　高橋相藏　市川量造　折井親信　久我道陞　大木靈命　增田義次　植村豐重　深尾友重　勝山多門　上村隆世子　百瀨やよ子

山村駒代子　山村ゆき子　二木道庸　稻垣圓成

中野義隆　田村滿義　太田畊造　臼井季雄

高野重方　永持道英　白川水翁　大月滿月

高橋宗柳　高橋佐久一　長崎賤夫　小林琴堂

宮川謙吾　宮川良一　太田今朝雄　赤羽如眠

明科犀川　宮川賴信　平林茂樹　平林眞胤

平林三千子　三輪宗三郎　千村俊相　千村家輿

龜子巖

○同　安曇

大久保親正　河内直武　竹內多　高山大槻

平林好里　横澤久米次　平林周太　平林きわ子

平林歡次郎　矢口時司　丸山小太郎　師岡規邦

飯田正玄　日比野允敬　山田春和　石曾根嘉

中澤俊三　丸山素屋　小松實時　藤森信通

丸山光司　藤森竹司　岡村金作　小松奥之
丸山義明　西村榮一　井口洗　中澤久保
小林徹肇　千野一忠　宮下探月　丸山薫美
佃　貢　青柳誠之　藤原紫花　中田常明
岡村一司　西村多美　西村重村　堀金國充
西村今朝次　小穴義長　飯沼都良雄　望月敎壽
越智嬢子　關　正寧　武田政勝　飯島美村
白澤義亮　白澤常子　白澤方直　井口近喜
青柳重允　胡桃　儒　三枝　經　三枝　正
三枝春生　古厩三芳　胡桃規正　矢口七次
吉田信光　吉田信文　吉田以智多　澤　義之
内山廣吉　内山有明　矢野口重照　丸山芳園
丸山字門　山本登　岡村耕眞　藤森壽平
竹内稱　戸田壽　飯田實　林　視良

矢野口保邦　岡村阜一

○施頭歌

信濃　石黒守稻

○長歌

大阪　眞鍋豐平　山城　岡本宣忠　紀有城　本久豐　備前　片岡正古

信濃　倉澤清也　信濃　藤森重春　同　矢野口保邦

第八、建築の異彩

當社建物中の美術として見るべきものは卽ち裕明門なり。正面二十一尺、側面十二尺、單層、切母屋造の建物にして、正面に向拜を有し、屋根は銅瓦にて葺き、金色の魚虎を載せあり。而して建築の手法は、藤原時代より傳はりし「和樣」と、支那より輸入の「唐樣」とを混合し頗る精巧美麗を極めたるものにして、所謂八脚門的の建造なり。組物等も小組にして、又其の内外部の裝飾的種々の彫刻物には特に緻密なる意匠と技巧とを凝らし、天井は格天井にて小組の一つ宛に極彩色にて動物を描きあり、之は村田香谷翁が晩年の大傑作なりと云ふ。此の格縁の交錯したる所其の他各所に金色の金具等附し

あり。盡く技巧を極め燦爛たる美術的建造物なり。表面には隨神の銅像を祀り、後方の兩側の間には、神馬の白きと黑きとを配せり。何れも優美の製作たるを失はず。

裕明門に次ぎて眼を奪ふものは神樂殿なりとす。建築は敢て珍らしきものにはあらざれども額天井に至りては實に高尚優美なるもの、額の數八十一枚、何れも大家の描きたる繪畫にして各々極彩色の大傑作なり。其の大家の主なるものを擧ぐれば。

一烏　橋本雅邦
一芭蕉　野口小蘋
一櫻花　川邊御楯
一月に桂　川村雨谷
一杜若花　兒玉果亭
一梅、竹、松、　小坂芝田
一紅梅、桃花、　高森碎田
一蒲公英　西春耕嚴
一竹、蘭、　猪瀨東寧

一桃、稻穗、　藤森桂谷
一水仙花　野口小蕙
一柿　星合雲堂
一牡丹　渡邊晨畝
一雲龍　森脇雲溪
一石榴花、手球花、　高木犀崖
一葦に雁　湘蘭女史
一日出松、菊花、　窪田松門
一紅葉　光陵
一萱艸　丸山山外
一牡丹　丸山松僊
一白蓮、百合花　岡田菊僊
一山吹、金箋花、　小林松濤
一山梔子、南天、　丸山雲田

一藤花　景
一葛花　麥
一石竹、美人草　增
一百日紅　曲
一海棠、椿、　山
一雁來紅　半
一蜀葵　靄
一芍藥　星
一石榴　井
一茄子　上
一百合根、栗、　野
一芙蓉　河
一松に靈芝　惠
一靈豆　梓

一黃蜀葵　蘭
一大根　殘
一菫　夜
一萩　楓
一水仙　細
一尾花、女郎花、　丸
一槿花　春
一檸檬　天
一桐花　章
一菜の花　望

第八、詩　歌

其の一、古歌、有明山、

續古今、信府統記、信陽雜志、千曲眞砂、地名考、

片しきの衣手さむくしくれつゝ有明やまにかゝるしらくも　後鳥羽院御製
續古今、御集、信府統記、

過ぬるか有明の峯のほとゝきす物思ふ時もいとひやはせむ　同
風雅、府信統記、千曲眞砂、

なつ深きみねの松が枝風こえて月かけ涼しありあけの山　前大僧正慈鎮
拾遺、玉吟、信府統記

月かけにあかてあり明の山のはや秋鳴鹿のたちと成らん　同
同、玉吟、信府統記

おほろなる月は入ぬる峯にまた花に日かけのあり明の山　同
愚草、信府統記、夫木、

てりかはる紅葉をみねの光にてまつ月おそき有あけの山　從二位定家
信府統記

信濃なる有明山を西にみてこゝろほそ野の道をゆくなり　西行
玉吟、信府統記

今はとてをちかへり鳴ほとゝきすおのか五月の有明の山　從二位家隆
夫木、信府統記

しのゝめの月より峯はあらはれてあり明山に秋風そふく　從二位爲實
新拾遺、地名考、

やよやなけ有明山のほとゝきす聲をしむへき月の影かは　從二位行家
夫木、信府統記、

ちりくもる峯の木の葉の風の上に月は時雨れぬ有明の山　參議爲相
名寄、信府統記、

はなの色は三月の末にうつろひぬ月そつれなき有明の山　後京極
夫木、信府統記、

我ならてまた物おもふ袖なれや木の葉時雨るゝ有明の山　光俊
新題林、千曲眞砂、

をしか鳴山は紅葉も有明のつきぬなかめや秋のあかつき　風早宰相實種

其の二、近世故人の歌

桂園　香川景樹

ひさかたの天のいは戸の明しより雲井にのこる有明の山

家集　月見つゝ千代も聞らし信濃なるありあけ山の峯のまつ風　小野古道

鶯玉　ひと聲のゆくへもみえて有明の山ほとゝきす月に鳴なり　塙保己一

家集　月かけは松かせ遠くあらはれてきりにしつめる有明の山　近藤光輔

家集　富士を見しゆめの窓より見あくれは有明山に月傾ふきぬ　柴田花守

家集　いる月のかけとみるまて殘りけり有明山の峯のしらゆき　林良本

檀落葉　とく見てんこゝろもしらす白雲の何立かくすあり明の山　内山眞弓

家集　あかつきの影はしらみて有明の峯にも月はかゝりける哉　丸山保秀

さす影もかすかなりしを今よりは朧ならし有明の山　高島章貞

其の三、

殘月集　ほの〳〵と有明の山はむかしより動かぬみ世のすかた成けり　從二位侯爵　久我通久

同　千早ふる神かきしろくみゆるかなありあけ山につもるしら雪　從三位侯爵　前田利嗣

同　しつけくゝ神のいかきを照らすらし有あけ山のあり明のつき　從二位伯爵　東久世通禧

同　よるひるの守りなるらん曇りなき有あけ山のあけのたまかき　正三位伯爵　佐々木高行

同　しのゝめのくものたえまにあふくかな月にはあらぬ有明の山　正三位伯爵　園基祥

同　あきらけき神のこゝろもくもりなき月のひかりもあり明の山　正三位伯爵　松浦詮

あり明の山さくら花さきしよりやしろ參りもしけきころかな　同　従三位伯爵　津輕承昭

ます神のみいつしられて有明の山のすかたそことに雄々しき　同　従三位伯爵　冷泉爲紀

ひさかたの雲井にのこる有明のやまの端ちかくすめる月かけ　同　正四位伯爵　勸修寺顯允

君か代にかけ照りそひて白雪もあり明やまのかひはありけり　同　従三位子爵　福羽美靜

千早ふるかみ世なからのおもかけを月にのこせる有あけの山　同　従三位子爵　黑田清綱

はる風にかすみもやらて照る月のひかりさやけきあり明の山　同　従三位子爵　稻葉正邦

あふき見るあり明山の月かけにこと葉の花もにほふけふかな　同　正四位子爵　冷泉爲柔

月かけのかたふきなから殘りけりほの〳〵みゆる有あけの山　同　正四位子爵　氷川神社宮司　風早公紀

信濃なるあり明やまのみねの松神世もいまもいろはかはらす　同　従四位子爵　增山正治

すみ渡る秋のゆうへはことさらになかめまされるあり明の山　同　従四位子爵　伊藤祐歸

月花と雪にも名あるありあけのやまのいかきに人つとふなり　同　正五位子爵　水野忠敬

いつれをかわきてあはれと神やみん月雪花のありあけのやま　同　正四位子爵　前田利昭

文をみてふみゝぬ峰のけはしさをおもひこそやれあり明の山　同　正五位子爵　北小路俊親

曇りなきみいつもしるき瑞垣にてりわたりたるありあけの山　同　正五位子爵　本多忠貫

ほの〳〵としらめる空もうち霞みのこるともなきあり明の山　同　正五位子爵　六條有熙

いはや戸を明けし神代のおもかけもほのほのみゆる有明の山　　從三位男爵　高崎正風

同

あり明の山の端たかく仰くかなみちかけもなき神のみいつを　　從三位男爵　千家尊福

同

あり明の山にのこりし月かけは神のみたまをてらすなるらん　　正三位　郷純造

同

信濃なる淺間かたけのけふりにもたちまさりたるあり明の山　　從三位　長谷信成

同

登りえぬ人のためとてなしをへしいさをも高きあり明のやま　　從三位　梅溪通治

同

信濃なる山またやまの高根よりたかくもみゆるありあけの山　　從三位　永山盛輝

同

神のますところとおもへはなにとなくあふくも高し有明の山　　正五位男爵　牧岡並ニ大島神社宮司　津守國美

同

常夜ゆく神代にたてしみいさほはいまもさやけきあり明の山　　正五位男爵　松木美彦

同

ます神のみいつもそひてたか〳〵と四方にかゝやく有明の山　　正五位男爵　宇佐神社宮司　到津公誼

同

よろつ代もかくれぬ神のみひかりを人みな仰くありあけの山　　正五位男爵　宇佐神宮權宜　宮成公矩

同

かきりなきしけみに神のかけそひて木間しらめりあり明の山　　正五位男爵　日前並ニ國懸神宮宮司　紀俊高

同、科野名所

はるの夜の月のひかりはをさまりて花よりしらむ有あけの山　　正五位子爵　藤井行德

科野名所

いなの目の有明やまの雲間より名のりて出るほとゝきすかな　　正二位　池田茂政

同、殘月

天の戸をひらきし神のみいつこそあり明山のみねにみえけれ　　從四位　三室戸治光

殘月

おもひやりて寢し夜のゆめにみつるかな月は中空に有明の山　　從四位　丸岡莞爾

同

かゝやける神のみいつを仰くかなそのなたかき有明のやま　従五位　小中村清矩

同　岩戸あけしそのいさをしにくらふれは尚ひくかりぬ有明の山　神宮宮司　従五位　鹿島則文

同、科野名所　霞む夜のそらもいつしかしらみつゝ月こそのこれあり明の山　従五位子爵　諏訪忠元

其の四、

殘月集　千早ふる神のみいつのあらはれてあふくもたかし有明のやま　正五位　柳原愛子

同　しなのなる有明やまの高けれはたえすかゝれるみねのしら雲　正六位　千種任子

同　世をてらす神のひかりは久かたの月よりたかしあり明の山　従六位　税所敦子

同　まつかせにむら雲はれてさしのほる月かけきよしあり明の山　正七位　姉小路良子

同　千はや振神世のかけもみゆるかなあり明やまの月のひかりに　正七位　小池道子

同　あたらしく立てし宮居もみえ初て月さし昇るありあけのやま　正七位　北島いと子

同　いとはやもまふてし人のあとみえてはつゆきふれり有明の山　前田侯爵夫人　前田朗子

同　千はやふるかみもめつらん咲にほふ花よりしらむあり明の山　鍋島侯爵夫人　鍋島榮子

同　めくみある神のひかりもそふはかりあり明山にのこる月かけ　増山子爵祖母　増山深雪子

同　ひろ前のあけのとり居もえそめてほのほのしらむ有明のやま　同　母　増山きみ子

同　守る神のみいつもしるし信濃なるありあけ山の月のひかりに　墨川男爵女　墨川千春子

其の五、御歌所

殘月集

久かたの天にそゝれるみむろ山有明のやまはみるにさやけし　寄人從六位　黒川眞頼

同　いはと明しその世の光りあふかれて有明山の高くもあるかな　正七位　谷勤

同　ふもとまでてり渡りけり久かたの雲まにたかきありあけの山　正八位　植松有經

同　信濃路やもち月もあれとみなひとのあふぐひかりは有明の山　小出粲

同　更しなもあさ間もあれとてる月のよにかゝやくはあり明の山　内藤存守

同　岩戸あけし神のみいつのたか〳〵にあふかるゝかな有明の山　坂正臣

同　ます神のひかりもみゆる心地してあけこそわたれあり明の山　鎌田正夫

同　大神のみいつとともにあふくかなあまそゝりたつあり明の山　大口鋼二

其の六

朝つく日さし出るまて月影のあり明山はやみなかりけり　東京正六位　三田葆光

天の戸をひらきし神の稜威より今もさやけしあり明の山　同　正七位　岡部長民

月かけの有明山のはる霞み宮城のさとにたちなひきけり　同　正七位　木村正養

ます神の大みこゝろをやすめつゝ尙世にたかく有明の山　同　從七位　貴島磯麿

あり明の山遠しろき雪の色や月にしられぬ光りならまし　同　大教正　本居豐穎

有明の山のたか根にます神のみいつ仰かぬ人はあらしな　同　北郷久政

寢覺にもみたく思ふはみすゝかるしなのゝ國の有明の山　同　松波資之

かたしきの高きしらへを有明のみ山と共に仰きてそみる　同　橘道守

春ことに神もあはれとみますらん有明山の花のしらゆふ　同　江刺恒久

皇神のこゝろもかくや有明の山の高根につもるしらゆき　同　揖宿近春

しなのなる有明山の高き名を聞けは見たくも成にける哉　同　加藤安彦

不二の根の名をもおほせて信のちや雲井に高き有明の山　同　水原史郎

岩戸明しそのみいさをは有明の山とし高く仰かるゝかな　同　井上頼文

ゆく雁はみねにかくれて月ひとり霞みの奥に有明のやま　同　三輪義方

久かたの月も霞みて有明の山よりしらむはるのあけぼの　同　芝葛鎮

照る月のかけものこりて久かたの雲井に匂ふ有明のやま　同　鋤柄清雄

朝まだき有明山にのぼりみれはこゝろ涼しく神風そふく　同　八十三翁　久間楳翁

とこやみの昔思へはかしこくもよは有明の嶺のさやけさ　同　岡田三生

雲かゝる有明山を仰きみれは昔のさまもおもほゆるかな　同　青木修

初音をは神にさゝけて信のなる有明山になくほとゝきす　同　小島弘道

科野名所

あま雲のよそに仰くもかしこきは神の御いつの有明の山　同　正六位　井上頼國

不如歸なく一こゑにゆめさめて有明やまの月を見るかな　同　遠山英一

月かけはそらにのこりてみしか夜の有明山になく不如歸　京都從五位　藤崎虎二

残月集

手力男神のみことはふさはしくあもりそいます有明の山　同　赤松祐以

千草ふる神世のやみも有明の山より明しこゝちこそすれ　同　尾崎忠恕

ひさかたの雲井にちかき有明の山よりいつる月の清けさ　大阪　正七位　北畠光家

雲きりを科戸の風にはらはせて世をてらします有明の神　同　八十五翁　雲林院雲堂

ほのみゆる有あけ山の黛はうすめの神のよそひなるらん　山城　正七位　男山八幡宮宮司　松原貴速

新らしく殿つくりしていやましに神のみいつは有明の山　同　權僧正　毘尼薩臺巖

ふもとには落葉しくれて月かけの梢にはるゝあり明の山　大和　大僧正　藤村叡運

大空の月にさはらぬしら雲はあり明山のさくらなりけり　同　榊原春彦

おもふことありあけ山の月影にひとりや妹か衣うつらん　河内　山田義顯

くれぬとも花の木かけを宿として月をも見はや有明の山　和泉　高山慶孝

あなさやけ天の戸明る日も月も神代なからの有あけの山　摂津　阿部野神社宮司　渡邊貴政

天の戸の明しむかしのおもほへて月のかゝみの有明の山　伊賀　敦國神社宮司　三田村嘉正

ことむけしその弓張の月かけをこゝに宿してあり明の山　伊勢　正七位　神宮禰宜　東吉貞

ほの〳〵と確氷の高嶺みえそめてあり明山にしらむ月影　同　正七位　神宮禰宜　中田正朔

神の代の岩戸のむかし今も猶あふけは高しありあけの山　志摩　大西眞直

ます神のみいつの光りしるけれはたえすも仰く有明の山
磐戸明けし神の御稜威もしるき哉闇にも見ゆる有明の山
ゆきて見ぬ有明の山さやかにも心にうかふ我寝さめかな
あなたふと天の戸あけし手力の神さひいます有明のやま
人みなの昇るもうへないちしるく神のみさちの有明の山
朝ほらけ月も殘れる遠ちかたにほの〳〵しらむ有明の山
神のます有明山の月かけにみいつも高くなくほとゝきす
千早ふる神のこゝろもあり明の山の名高く成にけるかな
なる神のおとはふもとに聞えつゝ月すみのほる有明の山
鳥羽玉のやみの岩戸をとりすてし神の力もあり明のやま
きく度に高き姿のしのはれて見えぬ目にさへあり明の山
神の代のあとさたかなる俤の有あけ山はさやけかりけり
こゝろありて有明山の櫻木も花のしらゆふ今そかくらん
月かけの有あけ山の岩かねはいく世かさねて榮え行らん

尾張　從六位　小牟田盛延
同　從六位　林　陸夫
同　權中教正　大島爲足
三河　佐藤三郎九
遠江　正八位　岡部政美
駿河　權少教正　淺邊隼雄
甲斐　淺間神社禰宜　中込榮枝
伊豆　三島神社宮司　正七位　秋山光條
相模　權中教正　丹羽與三郎
武藏　平尾其峰
同　育者　矢島要
安房　安房神社禰宜　岡島義鑑
上總　鴉田重榮
下總　中村計以子

霧の間は田ことに影をうつし來て月さへやとる有明の山
かしこくも仰きみるかな月かけの世にも名高き有明の山
かけしらむ有明山にすむ月の光りを世々に仰きみるかな
有明の山の端いつる月影はあるかなきかに疲てけるかな
かみ杉の木の間は猶もやみなから空にしらめる有明の山
明らかに治まる御代は有明の山にいませる神代よりして
常やみの世を手ちからの神わさに光りも渡るあり明の山
天地のひらけそめにし神代よりさやけかるらし有明の山
かけ匂ふ月を殘してさくはなの雲よりしらむ有明のやま
更るともくもらぬ空に照る月のあり明山は猶さやかなり
斯もやと思ひやるたにすか〳〵しはるゝ朝けの有明の山
みにしみてあはれとそ見る花の色も朧月夜の有あけの山
くにをてらす光りは世々に久方の天の岩戸をあり明の山
ひらけゆく國の姿とみゆるかな夜やほのほのと有明の山

常陸　正七位　眞柄肇
同　鹿兒島神社宮司　大谷秀實
近江　多賀神社宮司　宇津木久岑
美濃　權大教正　棚橋祿々翁
飛騨　水無瀨神社宮司　正六位　大池眞澄
上野　駒井眞蔭
下野　從七位　東宮兼二荒山神社禰宜　早尾海雄
磐城　宗田映盈
岩代　壬生惠詮
陸前　駒形神社宮司　皆川芳秀
陸中　島川竹介
陸奥　正八位　岩木山神社宮司　長利伸聽
羽前　正八位　月山出羽湯殿山三神社宮司　朝比奈泰吉
羽後　正七位　大物忌神社宮司　筒井明俊

鳥羽玉のくらかりし代も大神のみかけこそなれ有明の山
ほと丶きす一こゑ鳴て入にけりかたふく月の有明のやま
宮はしらふとしきたて丶かくはしき名は萬代に有明の山
月をたゝあふくのみかは曇りなき神の光りもあり明の山
動きなき有明の山の上にこそ神のみいつの高きをもしれ
天の戸を押ひらきたる神の代のむかしおほゆる有明の山
常闇に代をなさしとや神代よりあもりましけん有明の山
月影はいりてののちも鹿の音のあはれはのこる有明の山
大君のことの葉なかくてらします有あけ山の秋の夜の月
あさ日さす有明山を見てもしれ高くかゝやく神の功績を
誰しかも仰かさるへき神代よりさやけき月の有明のやま
天つ日のみかけさそひてしらみ行あり明山の神のはた雲
あまの戸のあくる雲井に神の代の俤のこるあり明のやま
千代かけて有明山のやま松の高きよはひも神のまに〳〵

若狭　加納利亮
越前　従七位　脇屋嶺容
加賀　正八位　横山政和
能登　正七位　加藤里路
越中　従七位　加藤里衡
越後　島山盛章
佐渡　正八位　美濃部槙
丹波　能勢頼保
丹後　佐々木高一
但馬　臼田蒼生比古
因幡　正七位　伊谷野冬雄
伯耆　住田正懿
出雲　有澤弐恒
石見　庵原政齋

皇神の尊きみいつは有明のやまのすかたにあらはれに覺
岩戸あけし神代覺えてさやけきは月もこゝろや有明の山
月澄める有あけ山のかけしのひ今はた寒く袖はぬれける
信濃なる有あけ山はいは戸別れ神のみ徳の高くも有かな
かむさふる峯の松かえわかれ行雲井のよそにあり明の山
あなさやけあなおも白し岩戸明し神代の名殘有明のやま
千早振神のみいつによりてこそ今もくもらぬあり明の山
更級の田ことの月の影よりもまつ仰かるゝあり明のやま
仰きみれはいよ〳〵高し皇神の御稜威もかくや有明の山
ほと丶きすをりよく聞しひと聲の面かけなひく有明の山
日の本の光りはよもに十寸鏡くもらぬ影のあり明のやま
神のます有あけ山にかけて思ふ花の白ゆふ雪のしら木綿
在神のみいつなるらんいち早く花にあけ行く有明のやま
しら雪のふりにしあとを思ふにも心はかよふあり明の山

隱岐　水若酢神社宮司　忌部正弘
播磨　従七位　上月豐蔭
美作　七十四翁　藤森恒景
備前　黑住教管長　黑住宗敬
備中　吉備津神社宮司　尾形嚴彥
備後　沼名前神社宮司　中島博光
安藝　嚴島神社禰宜　木村子敬
周防　今田寛
長門　住吉神社宮司　中村珍政
紀伊　日前國懸神社禰宜　矢田部弘典
淡路　伊弉諾神社宮司　乃美宣
阿波　大麻比古忌部二神社宮司　川田秀顯
讃岐　従七位　權少教正　赤澤龍江
伊豫　潮見琢磨

わさをきに天のいは戸の明初し光りは今も有あけのやま
をち近の人みな仰くみめくみを祈るしるしのあり明の山
宮はしらふとしき立てあり明の山は朽せぬ岩根ならまし
あふくほと御稜威さやかに有明の山の端高く月そ澄ける
久かたの雲井のそらに殘るなり有あけ山の月のひかりは
はなの上に月もこゝろや有明の名におふ山に影そ殘れる
有明の山にかゝれる雪とけてみそら長閑にかすみ棚ひく
なり出し神世なからのすかたにて仰くもたかき有明の山
今日よりはいや常とはに榮ゆらんあり明山の神の宮居は
ます神のみいつなからに遠き世を仰くも高しあり明の山
しきませる神のみむろと榮ゆらし有あけ山の峯の松か枝
ひさ堅の雲井はるかに明初し日かけも高きあり明のやま
仰きみて高きのみかはしつめます神もまさしく有明の山
手力の神のいさをに後の世の今も名におふありあけの山

土佐　島村雅規
筑前　宗像神社宮司　正七位　倉八隣
筑後　村上治義
豐前　西寒多神社宮司　鶴我盛一
豐後　従七位　毛利登
肥前　教正八十二翁　中島廣行
肥後　權中教正　佐々豐水
日向　高橋苦石
大隅　鹿兒島神社禰宜　石原久雄
薩摩　川畑梓
壹岐　住吉神社宮司　従七位　三角千金
對馬　海神神社宮司　佐賀和一
琉球　護得久朝常
後志　大竹元一

ありし世をしのふ袂のさえ〳〵て有明山に雪はふりつゝ
ほの〳〵と霞む雲井に見ゆるかな有明山のあけの玉かき
ほと〻きす名のるも高し信濃なるあり明山に神さひし聲
富士の根は駿河にのみと思ひしをわか信濃にも有明の山
人みなのいよゝ仰かん神々の高きめくみのありあけの山
夏きぬと雲の衣手たちかへすうらめつらしき有あけの山
しら雲をはなれてひとり大空に影あらはるゝあり明の山
言の葉の道をもてらせ有あけの山しきませる神の光りに
風を早み朝たつ霧も覆ほはねはさやけかりけり有明の杜
神のます有明山はあけくれに雲の白ゆふかけぬ日もなし
しら雲には山はわかぬあけほのゝみ空に高き有あけの山
踏みわけし功も高くあらはれて世にいちしろし有明の山
くぬき原みとりになひく白雲にそひえて高し有あけの山
天の戸をおし明かたの空清く月はみや居にありあけの山

石狩　江良千里
膽振　三橋中雄
信濃　水内　戸隱神社宮司　久山理安
同　埴科　色部義里
同　小縣　神尾成敎
同　佐久　阿部信通
同　伊那　林猛雄
同諏訪從七位　諏訪神社禰宜　岩本尙賢
同筑摩正八位　横内捨一郎
同同　佐々木了綱
同同　淺井洌
同同　權大教正　小山進
同同　大岩昌藏
同安曇從六位　大久保親正

ありあけの山ほとゝきす一聲にしらみ染たる松本のさと　同同　藤森壽平

天の戸のひらく雲井にあらはれて影さやかなる有明の山　同同　矢野口保邦

大君の御世安かれと祈るかなありあけ山の神のみむろに　同同　大教正　岡村阜一

月影はみねにうすれて宮城のはなよりしちむ有明のやま　同同　内山有明

信名濃日記

寢覺にも見たく思ひしありあけの山の麓に今日は來に鳧　東京　松波遊山

月のみと何おもひけん來てみれば花も紅葉もあり明の山　同　同

中房日記中の中房十景、有明山暮雪

神さひし有明山の夕まくれふりこそ掛れ雪の白ゆふ　信濃　安曇　内山有明

其の七、長　歌

殘月集　大阪　教正　眞鍋豐平

駿河なる富士の高根は　久方の雲に聳えて　大空に雄々敷立り　信濃なる有明山は　其山に高く並ひて　四方山に獨拔出て　白雲を冠と粧ひ　群山を沓と踏なし　四方山を奴の如く　子の如く卒ひ從ひ　勇々敷も立る山かも　此山にいつき祭れる　手力雄鋼女の神を　現身の世の人皆は　とことはに御稜威かしこみ　朝夕へをろかむ中に　岡村の吾か兄の翁は　樫の實に獨拔出て　御心を慰めまつると　有明の山をことほく　ことの葉を集め給へる　風流雄の中につらなり　數ならぬ吾も交らひ　愚なる此ひと言を捧げまつらん

ふり積るゆきのみかけは月かけは曇りもあへぬ有明の山

あさ日子の雪間をいつる光より四方にかゝやく有明の山

殘月集　山城　岡本宣忠

美濃刈科野の富士と　名も高き有明山は　白雲もいゆき憚り　あは雪は間なくふりつゝ　奇山と人はあふき瞻　かみ山と神もうしはき　春の日は木綿と薫合　櫻花たをりに艶ひ　秋の夜は鏡と照りて　月影も岳上に殘り　國擧り御稜威畏み　岩か根のこゝしさ忘れ　泡雪の消るを待て　往鳥の群り詣て　かみ山奇山としも　萬代に齋ひまつる有明の山

いはや戸を排きまつりし大神のうしはきたゝす有明の山

同、　詠有明山歌並短歌　備前　片岡正占

春の日の長野の縣　美濃刈信濃の國は　日の本のみなの大和の　國中に獨り秀たる　國なりと曾て聞けとも　行き見えは見れとしらねと　高き山こゝしき峯も　櫛の齒を引たる如く　數々にあるか中に

も　昔より煙絶せぬ　淺間嶽のこゝしき嶽　夏引の手引の糸を　更級の山も高しと　世の人の語り繼
來ぬ　しかはあれと安曇の郡に　有明の山と名におふ　其嶽に鎮まりまして　守ります神の名とへは
　天照す日の大神の　磐屋戸にこもらしゝ時　其御門の脇にかくりて　其御戸を細目に明て　見そな
はす時を伺ひ　大御手を引出たまひし　手力のすくれたる神　しかれ社岩戸別とも　稱へ名に負給ふ
らめ　相共にうけふねふせて　茅纒の棹ともちて　一二三四五六七八　九のたり百千萬と　諷ひ舞
ひふみとゝろこし　胸乳をはかき出しつゝ　裳紐をほとにおしたれ　俳優をせさせ給ひし　鈿女の神
の命も　此山に鎮まりまして　天の御門日の御門を　とこしへに守り給ひて　有明の山としいへは
天晴れ〳〵あなおもしろし　あなたぬしたぬしくもあるかたふとくもあるか
　日の皇子のいやつき〳〵に御代繼て天地のむた有明の山

信濃　倉澤清也

同、

神ろきの大山祇の　いさをしく國の鎮と　神なから並立ませる　山はしも多にあれとも　居待月有明
の山は　美鷲刈信濃の國の國中に神さひ立てり　此國は國てふ國の　其中に日高見の國　くに中の山
にしあるを　此山は其山國の　上にしも立てしあれは　山の上の山なる故に　此山をさしも高しと
入しらす又此山に　神なからいます神をも　尊しと人は思はす　其神を尋ぬも問はす　夕月夜おほに
過ぬれ　これをしもあやに慨たみ　此を思ひその岩はも　天地のそきへの極み　踏こらし其高ねはも
　足引の山のまほらと　天雲の空かき分て　のほり立高く尊く　闇の夜も光を放ち　こゝをしもあや
にむかしみ　靈幸ふ神世おもへは　此山におはす神はも　闇の夜を千世常とはに　照します功尊し
石戸別大宮姫の　二はしら奇き御稜威を　いや高に照す御山は見れとあかぬかも
　ぬは玉の夜のやみ路も有明の山の光りにかけはかくさし

其の八、詩

東京　正五位　日下部鳴鶴

靈山特起欝嵯峨、華表石壇依澗阿、秋雨蕭條感何限、一篇御製白雲歌、

過有明村作

東京　貫名海雲

有明山下有明村、殘月斜臨戸戸軒、豈要深秋寒露結、夏朝往々認霜痕、

吉原古城

維昔　皇祖天照日、籠天巖窟六合黑、六合黑兮涌萬奴、多力雄神擺富窟巖、巖扉開兮神人歡、歡咲之
響震乾坤、神光先麗有明山、有明里兮開闢焉、光痕不滅山長輝、有明々神玆降鎮、於玉光神德輝萬斯年

望耽山

小西皆雲

萬山含雨望中暗、獨有孱顏觀夜闌、初信俚言曾所耳、起呼筆硯寫峯巒、

京都　村田香谷

又見芙蓉聳信州、玲瓏岳色幾千秋、至尊曾賜白雲詠、猶有白雲懸嶺頭、

大阪　小川觀山

飛來富嶽信陽間、玉雪四時開笑顏、一色晴光輝衆壑、煙雲不許等閑關、

越前　雪蓬林陳

飛散曉鴉鐘磬寒、西窻落月有明山、遺題不燥帝衣露、無奈當年天步艱、

越後　正八位　肥田野輝

威德千秋眞赫哉、蒼生永賴免凶災、山頭明月今猶古、題詠曾經勅撰來、

信濃　武居用拙

安曇郡內有明山、信富峰名傳世間、想見下弦前後際、曉天殘月滿孱顏、

同　高橋白山

有明高秀白雲端、宿霧晴來立馬看、十里清沙擁山麓、瑠璃杯覆水晶盤、

同　生野臨星

孤峯帶黛櫛煙鬟、秋暮寒巖誰得攀、栖鳥猶眠落木朶、殘蟾半竄曙雲間、

同　城世敬

魏然靈坐輝、瞻望幾千尋、聊題標微言、松柏歲寒心、

同　松原衢

仰岩嶢於至高、欽神德於無疆、

同　是軒齋藤順

奇峯削立信南州、嵐翠蒼々氣色幽、一自山神鎭斯地、威靈光被幾千秋、

同　荻窪乾山

信陽富岳有明山、高聳如削步々難、聞說王師討賊日、祭神坂將此躋攀、

仙臺　鈴木松嵐道

幾回早起倚危欄、秀嶽尖峯擁翠鬟、看取林鴉猶未散、曉光已照有明山、

渡邊方壺

西山月落夜明峯、削出稜々玉屑濃、伊昔風流遺國詠、于今形勝鎖神蹤、梳雲螺髻三千丈、映雪瑤臺十二重、下有一川清若鏡、中流涵影碧溶々、

保水橋頭雪、欲消春色斑、綠光波上眼、飛在有明山、

信濃　高島章貞

奇峯岐嶫白雲間、澄泉一道迸仙寰、高嶽翠巒遙競秀、獨傳御詠有明山、

同　森本湘竹

將軍叱咤絕壁間、水激石飛兵馬艱、雄略殲兇千古事、依然翠黛有明山、

明嶽雜詩　十二首

正四位　巖谷修

神手力何雄、忽排天窟戸、飛來一片巖、萬古鎭玆土、
田將奉天勅、來誅八面賊、偉哉一掃功、永仰三神德、
維岳極千天、有明神恭々、烈日仰威靈、春風施惠澤、
崇祠久就荒、岡氏慨然歎、資財不少吝、誓復宏莊觀、
爭致敬神誠、春秋修祭祀、可喜民心和、可欽風俗美、
信地本宜桑、加之天產繭、逐年生業昌、人口益繁衍、
明珠之所藏、明神之所宅、有明名不虛、無月夜猶白、

其土盡膏腴、其民自淳樸、明神愛護之、永以降嘉福、
王室日陵夷、陪臣頗橫恣、一誦白雲篇、慨然興志士、
勤王首起師、仁氏眞忠勇、成敗何須論、只知君命重、
矍鑠臨犀翁、八旬加八歲、名山藏奇文、毫鋒老逾銳、
神山鐘秀靈、凡手不能摹、賴有桂翁筆、爲吾寫一圖、

宮城十勝

信濃　森本湘竹

其一、　松尾清籟

石階百級履聲頻、半是賽人半雅人、堂宇寂荒鐘磬絕、滿山松籟午凉新、

其二、　岩戸塚晴嵐

高原漠々隔清潭、風歇雨晴綠似涵、林下荒墳誰討問、村翁路畔說天靈、

第三、　夫婦岩歸樵

點々有家々近岡、路通枯草亂松傍、陰雲催雨倚窓待、夫婦巖頭歸志忙、

其四、　王橋夕照

滿溪礧硌白如霜、浪激煙飛水欲狂、紅影翠光描不就、板橋小立對斜陽、

其五、　隱花明月

三郡一望十里秋、巉巖爲崎峙溪頭、月華落水玲瓏影、疑是銀河地上流、

其六、　魏磯城殘鶯

腥氣侵衣土窖風、巖如太古畫空濛、鶯聲歷々爲誰囀、萬綠叢無一點紅、

其七、　明王岡遠望

高水犀河流漾々、筑安平埜吟眸曠、群巒對峙不爭高、如向明山殊揖讓、

其八、　社頭紅雲

郊埜遙看綠似氈、東風吹老古橋邊、山靈獨領春光得、滿目紅霞花欲然、

其九、　狩闇杜鵑

不動之巖蝙蝠石、山頭突兀白雲橫、幽溪深樹天如窄、晝闇猶聞杜宇聲、

其十、　有明山新雪

朝來戴雪改淸容、千古岩巒抽亂峯、旭日射山々更秀、玲瓏天際玉芙蓉、

宮城途上　　信濃　藤森厚

十里平蕪近古城、人家斷續繞泉聲、王孫遺蹟存此地、到處村農說姓平、

巍然特立信山宗、帝使郭師描秀峰、一嶺當西夏仍雪、銀屏曉落墨芙蓉、　　東京　坪井咬榮

雲氣騰々壯曙光、嶽神飛舞白霓裳、誰知四埜崇朝潤、渾灑從霄間沐湯、　　信濃　小澤南畦

仰則可看豈易攀、屹然聳在衆峰間、狀如富嶽長留雪、人謂信濃不二山、

孤島渺范別有寰、輦輿句北遂無還、袞衣霜重月光冷、御詠一篇繫在山、

巍然壓羣嶽、靈氣自氤氳、早起倚欄望、曙光淡染雲、

大正四年十一月十日著述
大正六年四月十日印刷
大正六年六月十三日發行

定價金七拾錢

著作者　長野縣南安曇郡有明村四百四十三番地　內山太一
印刷人　東京市小石川區久堅町百八番地　市川七作
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所
發行者　長野縣南安曇郡有明村千六百五十七番地　野々山義長
同　同縣同郡南穗高村百四十番地　小穴民彌

發行所　長野縣南安曇郡有明村字宮城　有明山神社々務所

73

324
329

終